諸物名所之覚図

ル 4
1734
4

播磨名所巡覽圖會卷之二目錄

牛堂山圖分寺　牛堂 兩山堂 五佛如來 金毘羅 天神 牛塚　增場山
印擇河　神明宮
乃辻塚跡　姫路鎮城 姫山
御坐所
御靈祠
市川
御建寺
惣社大明神　本社十六社一ノ宮 二ノ宮 稻荷 妙き久 幡宮 神殿 神水 御供石 神廟 叡向松 八幡 御誌石 小社迴廊 府中深迷事中約多 魁石
逢松原
刑部大明神
月圖 上地沢
日川祠
慈恩寺
爲國長者宅地　傾城淵
日川祠
手枕堂
國府寺改號
菅田故墟
心光寺　菅田氏石塔
船場德本寺
雄山　長尾山 大嶽社 天滿宮 岩山 十二石指現
姫路寺
書日明神
國府渡
三九湯門渠　那波城
雲尺川　雲尺渡

4734
4

紗矣明神　本座 日明神
會松原 無溪　松原八幡 大発銅 来社 八祠 所産石 鶏白石 猫石 女夫石
千濁塚　麻布山 地名権現 紗著 麻生神社
大日ノ森　惠比酒祠
妻藤澤三郎墓　黒田氏墓
弥磨澤 日市日川 日ノ掛澤　新羅明神社
清水　妻藤川渡
孫三餅　澤田細江
若一宮ノ權現　長谷山観音
星田若清水　石山燃跡
高松寺　長者原跡
龜牙寺旧　人丸塚
　右ノ宝 念佛堂　大嶽祠
　風藤堂 義塚

増位山 本堂 護ノ堂 経堂 弁天 文殊堂 観音堂 七ツ堂 山王 開山堂 開蛇井 鐘楼 政所 郡原巻
廣峯牛頭天王社 三大神 八王子社 白幣社 軍厩 諸書社 天社 又社 護王不 経蔵殿 九郎神社 奥院
廣峯七坊　平井寺
古山八幡　笹編
誉田明神　黍田ノ祠
八荒神社　三和大明神
討捕兵主神社　若居寺遺趾
吉山　御石清水
濱淵澤　御幸阪
稲岡ノ社　妻山ノ社
大歳社　妻乃岡
加茂社　餝西驛
　実法寺
　天濁宮
孫高峯
御田荘神ノ岡
甲山神社
高岳神社
手柄山
御舘
妻山
秦武縫ノ
綱敷天神
白牛

簑寺　大樹清水
女人堂　紫雲堂
札納石　念佛岩　護王石　投釈天祠　投石岩　烏帽子岩
文珠岩　布田墓　淮頂水　釈迦堂
不動岩　両天濩王　奥院　武部墓
揖保　黒岡明神
楽々天祠　投楽寺遺趾
揃山岩城趾　掛水清水
二王門　弥勒堂　聖霊投釈　昭堂　弥陀堂
揃橋　富小川　春日明神　碑石　七枝
糸の井　ふくろ井
八幡宮　小山田高家屋敷を刈る地
金輪山寺　栗駅寺
袈裟　足
書写山王院鳥居　車寄
来迎石　茶所
書写山圓教寺　如来論叡山也　弥陀如来　釈迦如来　阿弥陀堂
坂本城趾　水田城趾
同天祠　竹川
根本寺　古田寺
観世山瑞龍寺　弥勒菩薩　観音　三層塔　山王社
坂石城趾　班鳩ノ蹄
揖保川　七居
投石城趾　朝日山大日寺

鶴立山大光寺　林松寺
化粧坂　家塚
赤坂清水　家塚
大塚　大塚　加塚　小五塚　とこしま
揃う塚　投塚　揃う塚　投塚　佛岩　八郎岩　長年浦
白名園　破籠神社
峯相山鶏足寺跡　古師村
粒天照神社　神座塞
大悦村　林田陣屋
白井水　疫寺跡
琵琶山　八幡宮
松山城趾　柴猪城跡
張飛雅将墓　塞山城趾

天満宮　丁村　陳屋
山王権現　家塚神社
院家塚　飯盛山　吉浦　宮浦　岩石
天狗塚　観音淵　丹生塚　松塚　蝕柳塚
相生の石碑

水波女　嫉妬塞　亦の松原

龍眼水　法善寺
陰岩井　岩屋城趾　一筋川
疫寺跡　忘井
八幡宮　
柴猪城跡　
塞山城趾　那波山権現社

橘磨名所巡覽圖會卷之中

御着驛　御着村ニ若狹山法華寺ノ末寺ニ而本尊ハ釋迦ノ立像ナリ又祕佛ノ觀音ヲ山ノ神ニ祭レリ○村中ニ大川大歲社アリ西福寺ニ寺内ノ延命村ノ古地アリ

御着古城　村中ニ遺趾アリ村上源氏ノ末孫ノ小寺加賀守則職ノ居城ナリ

牛堂山國分寺　牛寺ニ云　三村ニ在リ國分寺村ニアリ

天平十年詔シテ國毎ニ國分寺ヲ建ルニ依テ續日本紀ニ曰ク毎國ノ僧寺封ハ十戶水田十町ヲ施入ス尼寺ハ僧寺ノ半ニ二十町ヲ施入シ僧寺ハ必二十町ヲ令シ尼寺ヲ以テ法華滅罪ノ寺ト云ヘリ　一國二寺

金光明ニ天王護國寺ト號ス尼寺ヲ名テ法華滅罪ノ寺ト云ヘリ

寺記曰南大門ヨリ奥院マテノ路南北二里余東院西院乃向東西二十余町アリ

南大門ノ本尊ヨリ二十町下ノ三叉乃二階堂ヲ云是ヲ本尊ノ基跡如來長四丈餘アリ

奥院ハ八重畑ノ長谷ニテ本尊ノ觀音東院阿弥陀大日山乃物見ノ西院ハ市ノ谷ニアリテ本尊ハ如來ナリ本尊ハ厨子ノ像ニ立ノ基跡佛ノ釈迦阿弥陀

十一面大威徳日月二天十二神ノ立像アリ

本尊ハ秘佛ニテ拜スル人稀ナリ

寺内ニ七佛ノ基所アリ

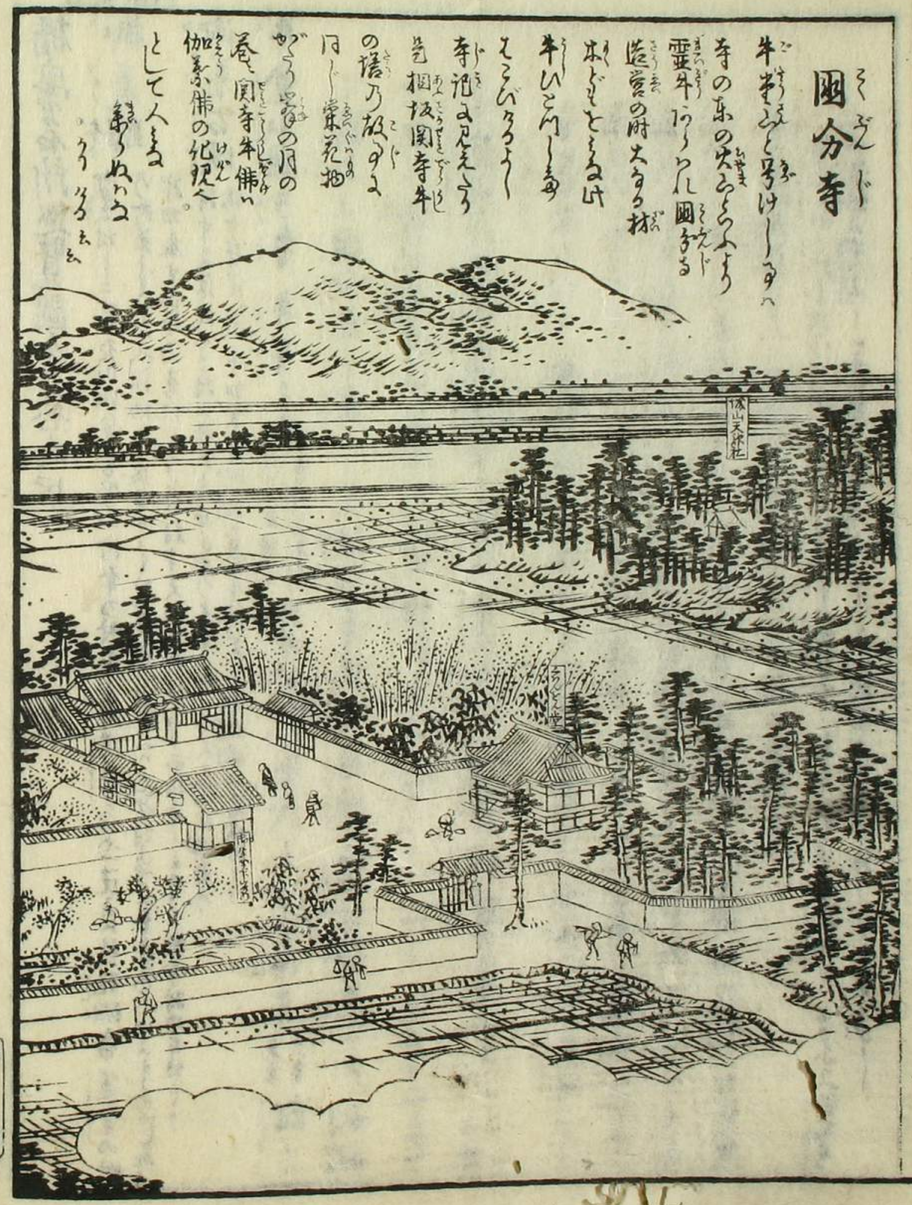
をそ社森　鶯塚

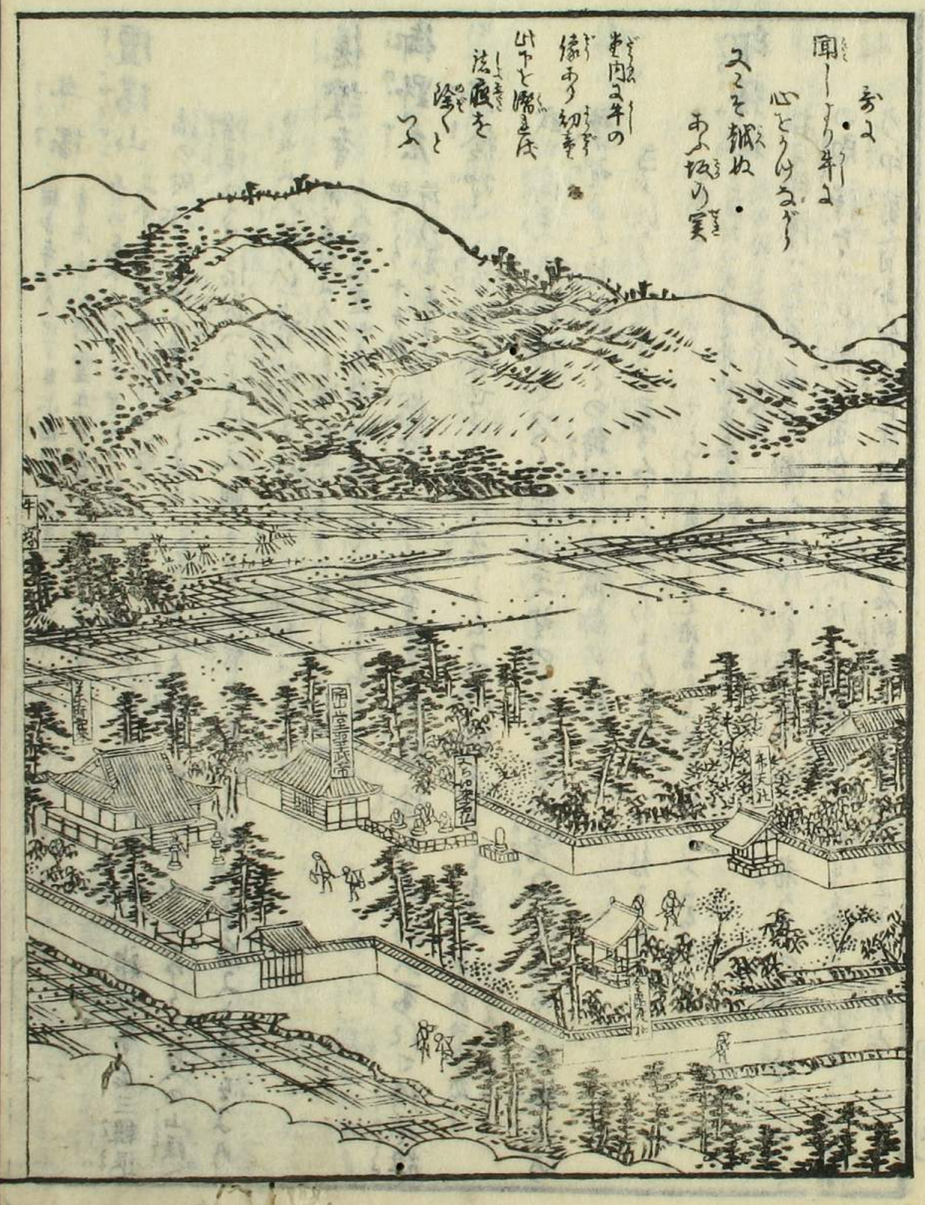
唐猫谷　花垣法水

號部淨瓦塚　龜の山

國分寺

牛若ふと号けしより
寺の東の大ふくふう
霊牛つゝみ國分寺
造営の附木なる杭
木ぐもとなる此
牛ひとゝしより
もとびくろう
寺泥土えう
号相坂関寺牛
の語り故事
ほゝ栗苑畑
ぎうなの月の
巻、関寺牛佛い
伽藍佛の化現へ
として人も
絶ぬいろ





あふ坂り実
心とゞめる牛よ
関ゝより牛よ

牛岡の牛の
像あり幼童
山中と称る民
法施を
乞ふと

牛塚 國分寺より北丁五小田の中にあり生字一ノ
寺内にそかの霊牛と葬りしとの人有り

壇場山 寺のうしろにあって里人これを場らくともいう
又今鹿の藥らくともいう
治の御初せ給へ壇場とも云○昔いと
壇場のまへ信仰へらく○又國分寺造営の
実と入給して霊地示されなどと縁起又乃へらく

徳證寺 御若村にあり昔の國分尼寺の後
一人の尼蓮如上人と帰依して一向宗と
成しより十ケ村 俗悟と称功皇后
浄の所号より

御野屋 野鈴村と号け合せて三村屋とも書之
或云高美の将場をいう既と文
禁ぬるより惟高とこの将場と後成郷の歌と
きこえて珍ずと若うらをえてあそびまひいさ結くらん

印鑄淵 昔敵と照村の氏神と称功皇后御凱陣の
旗の鈴を鋳しと云伝ふ
按と印澤は先軍令り澤と本澤と
の即澤なり兵飾と又御と抽ぬは
の印契と日本紀垂仁十五年澤石別命とみゆ○山山のこと八年辞ふらく

神明宮 山服村にあり祭神陽神盃波の中
神佛の澄給多久しく称て実らぬ

勅使 村号と小川村の南にあり石垣む〜書写山僧造の舟
敵使宿と云伝ふ

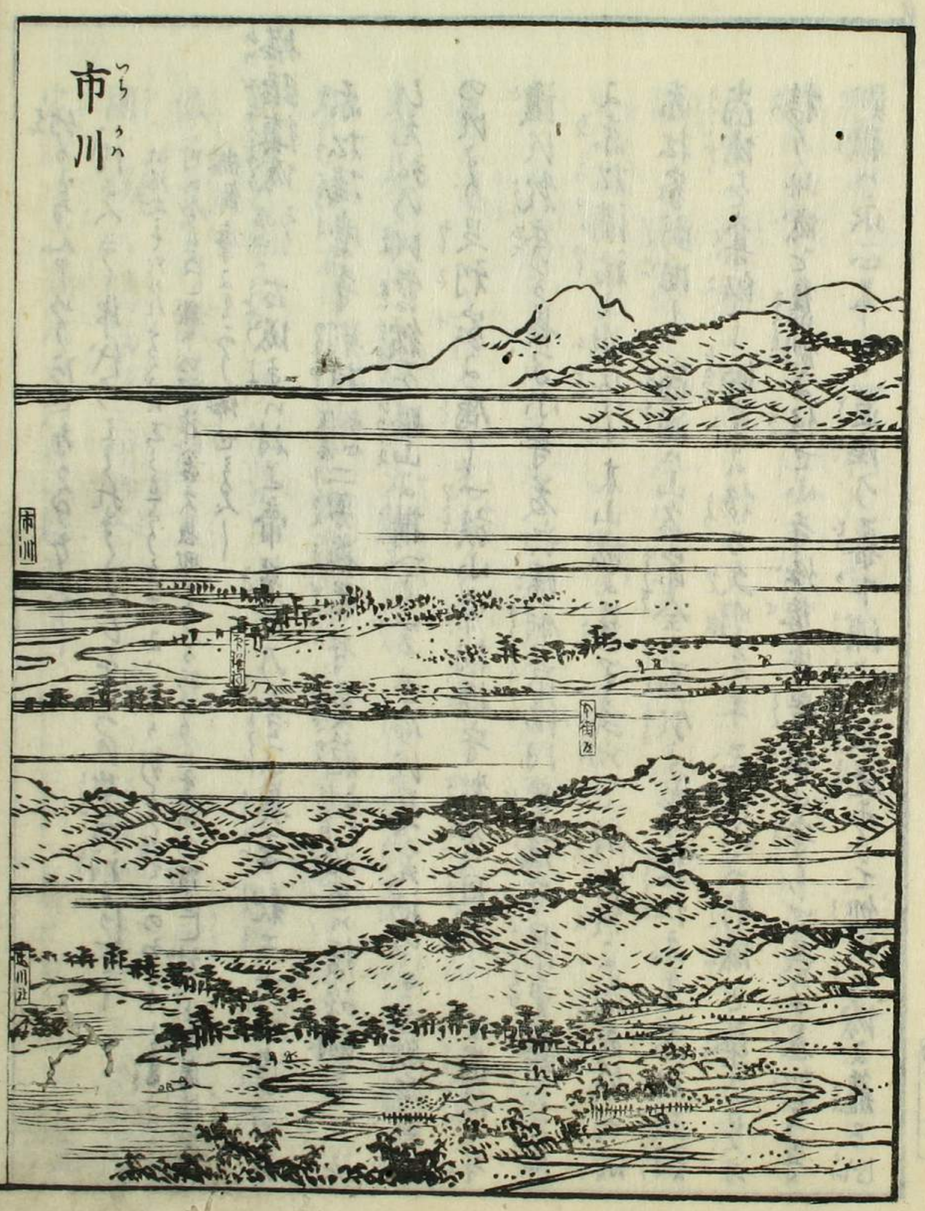
市川 國衙より西を妹背川とも云
中流より二流とあり西を妹背川とも云

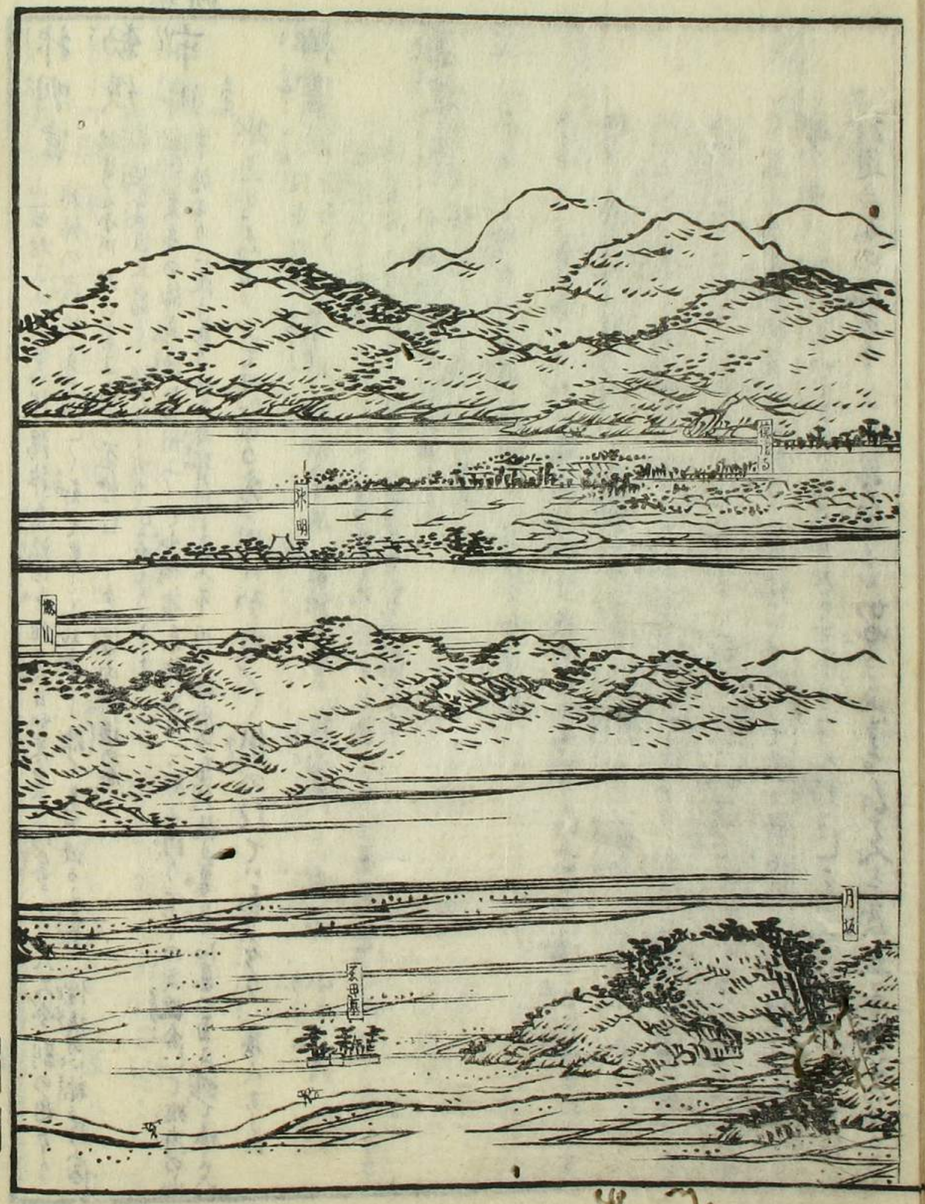
水上もろくそ見ゆる市川のかりく波のたてやうら 源八

御霊社 旧本の郷 祭神 神功皇后 應神天皇 猿田彦 大歳神 小名彦
俗湯内て神屋天神とも云来歴名義いと松本天神と号て國分寺の
御霊社と合せある○村中と國分寺のうち名所
道辻塚趾 今堀府社と云祖神とも
撒きとされども叶ず其の西まで

今川より後九州と往紀紀 るゆきそとうち南とにうたる家伝風に」うはもろまの里とらんから語の也」陽うしとも
何うこれうちに生るけ〜き遠よそまで川の遠う近く石の塚一ツ埋り先い神の坐と云ふ
る物のかくも二ツそへり」と何そ」と伝ふ」う山道とた」めて有る旅人いまき
もの中きり石と云ふ」く石の塚とめぐりてのち男女のうるまんのまねを」て
あるう」と」しがとかたうそうん埋り」る源や山神の本社い
程近き本の海の中と云ふ」るが如く度ゝ御社の東ぎ

市川（いちかわ）





姫路繩城 姫山と云 右城も赤松村上帝筭七乃皇子奥平親王十五世の苗裔赤松播磨守則村 法名心二男統若守貞範 法名祖父帝より後ひえ弘乃比嘗破を姫山より構へ玄孫小寺相模守教秀周代〳〵て當城と守のひより足利家より属し一族小寺相模守教秀長る小寺官兵衛尉景治日豊後守景重嘉吉元年護り教秀より赤松満祐より附城し本山城より籠り武功と旌し級より討死ひこの時赤松家断滅し當國い山名宗全が采邑となる意仁元年赤松政則當城を奪返し迎玄孫ひ播る文明元年垂塩山より影城を築き是より移り此城と爲例より任せ小寺修理守豊職より守らせ其子息加賀守則職い永正年中置塩より幕下浦上が叛逆ありて備州の城より籠るし

時則職い討手を蒙り備州み発き合戦し数陣の計略み施して終り討死ひ嫡子英濃守職隆當城護る次み小寺官兵衛孝隆守護ひ天正五年より到て織田信長公卒天下の政當國を奪ひ吉み編み三本別所と職して後此城より移り給ひ日八年より英賀城を隔て日九年より毛利が出城岡山鳥取城を落しけ姫山より三重の殿守と築日十年六月二日明智日向守光秀信長を弑ひ依て當城い羽柴本小市郎秀吉長み護しめ上洛みて光秀と滅し日十三年天下一統創業あり秀吉長い和州より移りて大和大納言より任ひ當城い本下肥後守家定守しめ日右虎門佐勝忠城番ら為て秀吉云ひ海を隔て武威異國より及ひ豊臣と号ひ関白を歴て當國より昇進給ひ依て日本乃諸侯於地を変改ら慶長年より池田ふ輝政み當國と領ら姫山の城郭ひ二年の歳月乃功を積ひ輝政入府の後此三村を都て姫路と号ひ

惣社伊和大明神

末社十一社

内殿若宮

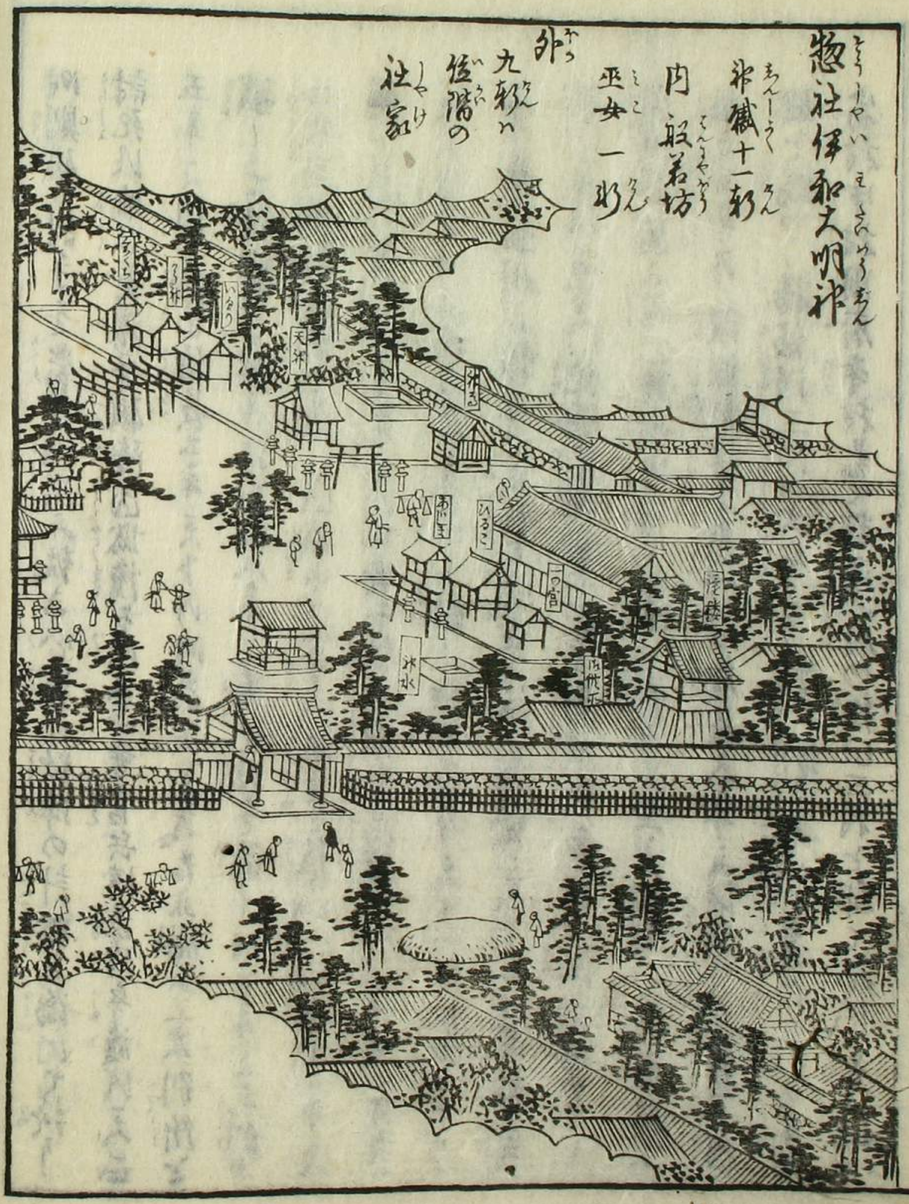
平安一社

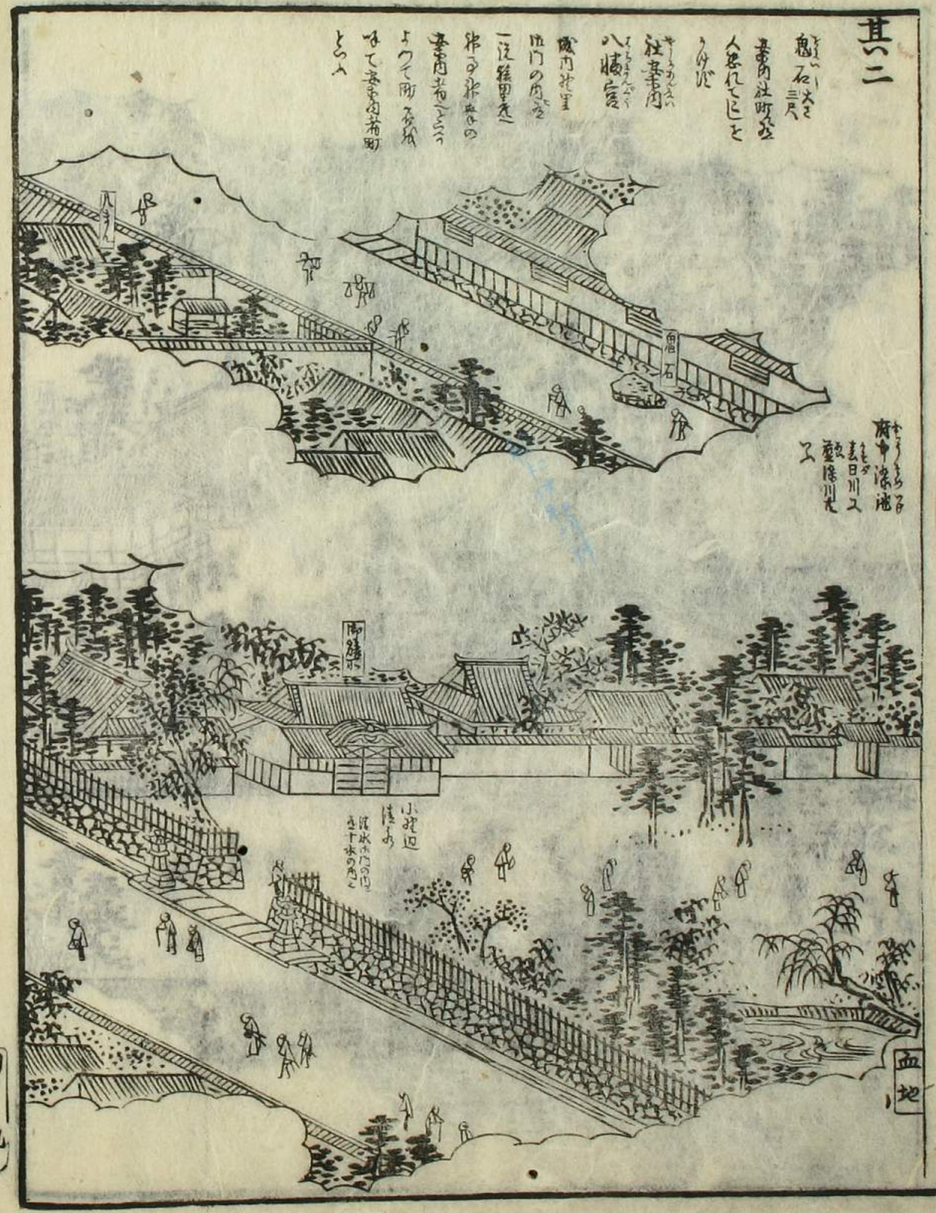
外

九社

位階の

社家





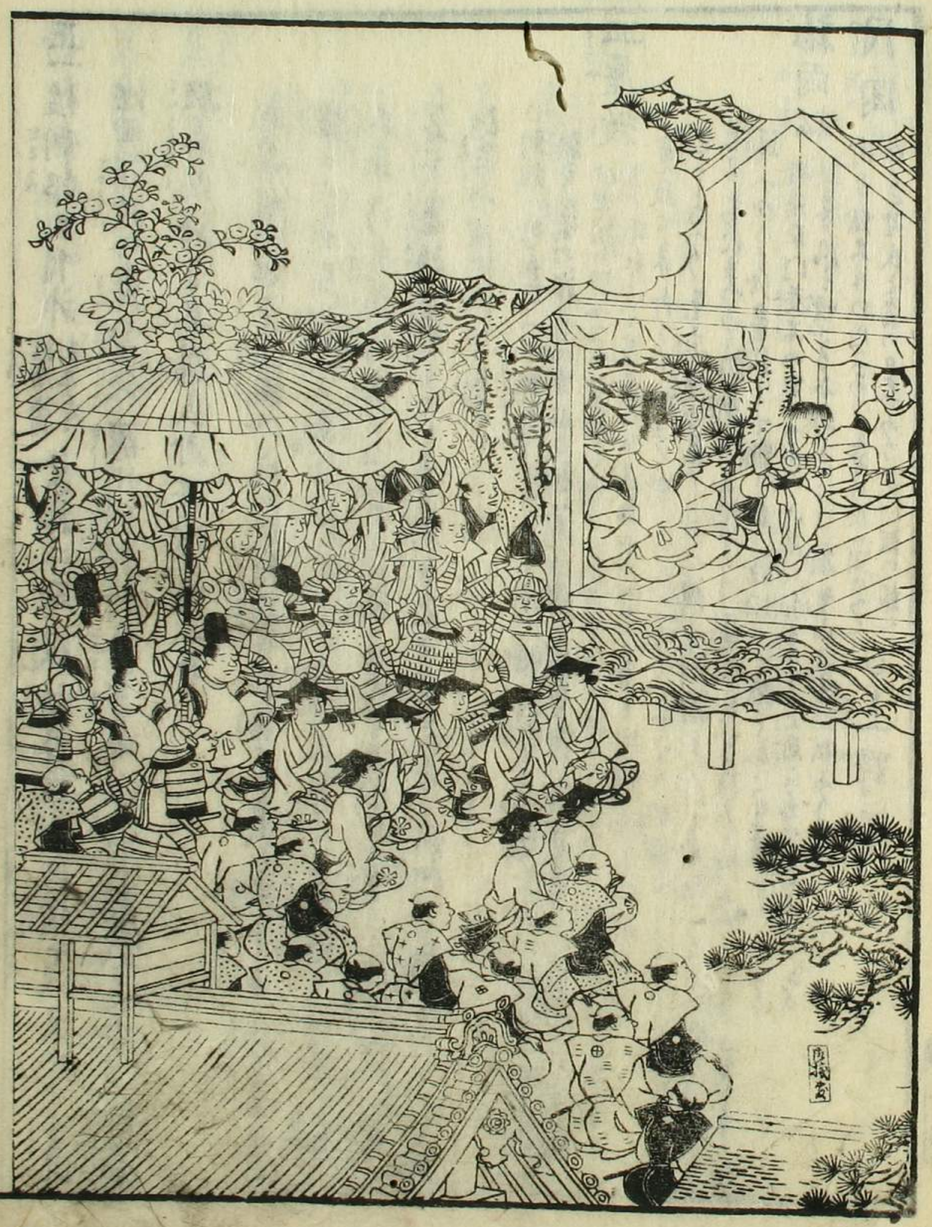
改む　即ち城を再営して舊觀よりも封境廣大し慶長十三年始めて五重の天守を築き九ケ年を経て東西三十六町五十間余南北二十間余東の橋本町西の龍神町六丁目南小社三町ばかりありて市廛軒を並べる民住の歌人猪湯古城記

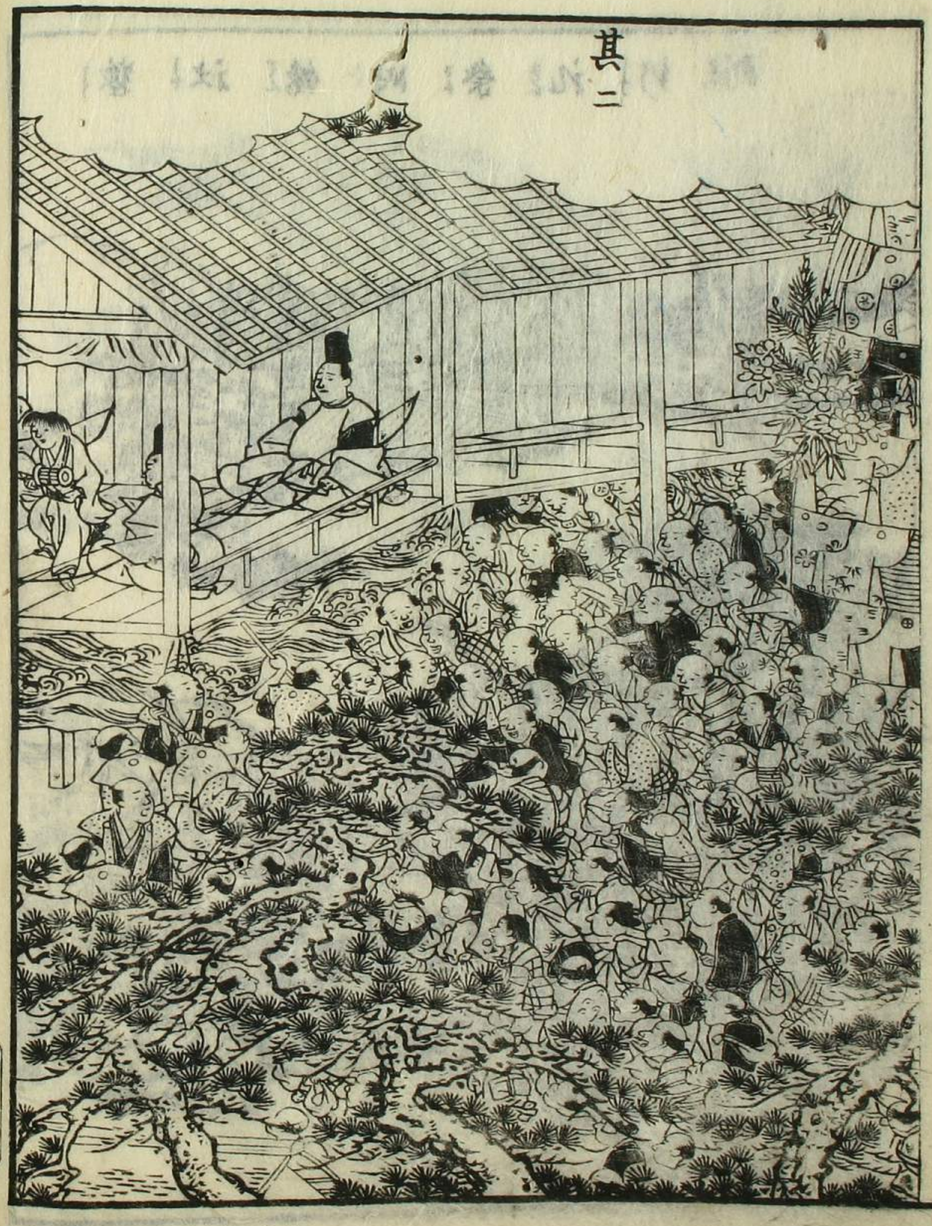
姫山　今の姫山の名あり姫路城内の一名なり一説には西の男山あり老を射てこの名あり一説には昔日系幼帝の茵縣園神の播磨名所圖會に姫路城内に姫府國府寺村一郷の地を称して山ありと記せり又姫路城内に姫井と号する尾姫ともよび井戸ありと云ふ（尾張名所圖會）

惣社　伊和明神　姫路傳士町　祭神東殿五十猛命　西殿大己貴命中殿九和神

神祕　社傳曰人皇に十七代淳路慶帝天平宝字七年国司の一宮より數國の惣社軍戦勝利を祈誓せし時大己貴命水尾山より降給ひ（今城西隻山と云ふ）国内を按行ありて九所の霊祠を傳せ社を郷本の地より遷座ありし（内裏大記）其後寛和元年正月廿三日

草之郷村楠兵衛神社神名二座の内五十猛命を脩むる二神一光の御
あり月年六月十一日束社を封ぜ一月十一日延喜式神名帳撰定
國五十座神大七座小七十三座を大己貴命左右に脩せ額の諡曰軍八阪止云々惣
社脩和大明神と書ス軍八阪と号るるハ満軍神の阪ヨリ来る名ハ八百萬神の阪ヨリ来る名ハ八百萬神の阪ヨリ来る名ハ八百萬




其二

正一位刑部大明神 姫路城内 祭神二座 秘仏 作と伝傳て八天堂と号ク

池田輝政の産霊神濃州刑部村大己貴命を宮ゐ移して祭るとぞ 別当

般若院 神を馬場氏神供所長源寺

武日世俗此神を老狐ととりひて妖怪をおそりて是を恐るゝ者多しとぞ

堪うる事草綱同き狐百歳ふるとき化して人の眼を惑し人を惑ー

ふ事の老狐魑魅をなしてふ事を集解まへのことく例をひきてかんがへ

ひまべきものにんや

○刑部の廻式の刑部宿とよべるは此地名の神宮の中小刀出石流治流

跡なる石の神宮の中小刀出石流治流と書つゝ播州志の誤なり風土記

皿屋敷 此世話の児女まのしるせるは芝居のかきものゝ誤なり加古

宿政七年刊行の芝居のかきものゝ誤なり加古

出るところの先妄説の基しきゝ漢名玖珂

をる者にまつわりの那ちは智ありて淵化して蛇となり迷ひ男女みとり

梅雨松 姫路車門垂本の中にあり人柱の事ふるき事ゝいへり

淀うてうし女鞠之若い社地も壮んみゝ赤松満祐の事都も

月岡 御幸橋北の西にあり土地の尻い岡の

みさく社司山氏五門堂を庭角社堂廣真女垂ゝ御の小管ここ

今土地氏と名のる家あり先山沢の

雄山 古名 長尾山 この外よりあり山の

を同ゝ御ゝ川を隔ゝ

鷹神帝。玉依 三座 人皇七代

ゝ其ゝ長尾男命の居給ふ

なりまる玄尾の丸雲ふれてちゝもその玄をゝるゝ

大歳社 祭神雅産霊命

祭神迦遇突智 十二所権現 旧名 侍町

慈恩寺 十二不の 本尊観世音

義国長者宅地 二源朝ふり今の町人の居住るあり中来本洋

姫路寺 姫路城名寺ゝ本尊薬師如来之

傾城淵 義国の第ゝ久ゝ吉の関ゝ池ゝ中縁洋ゝ

乞拠野 山の丸村

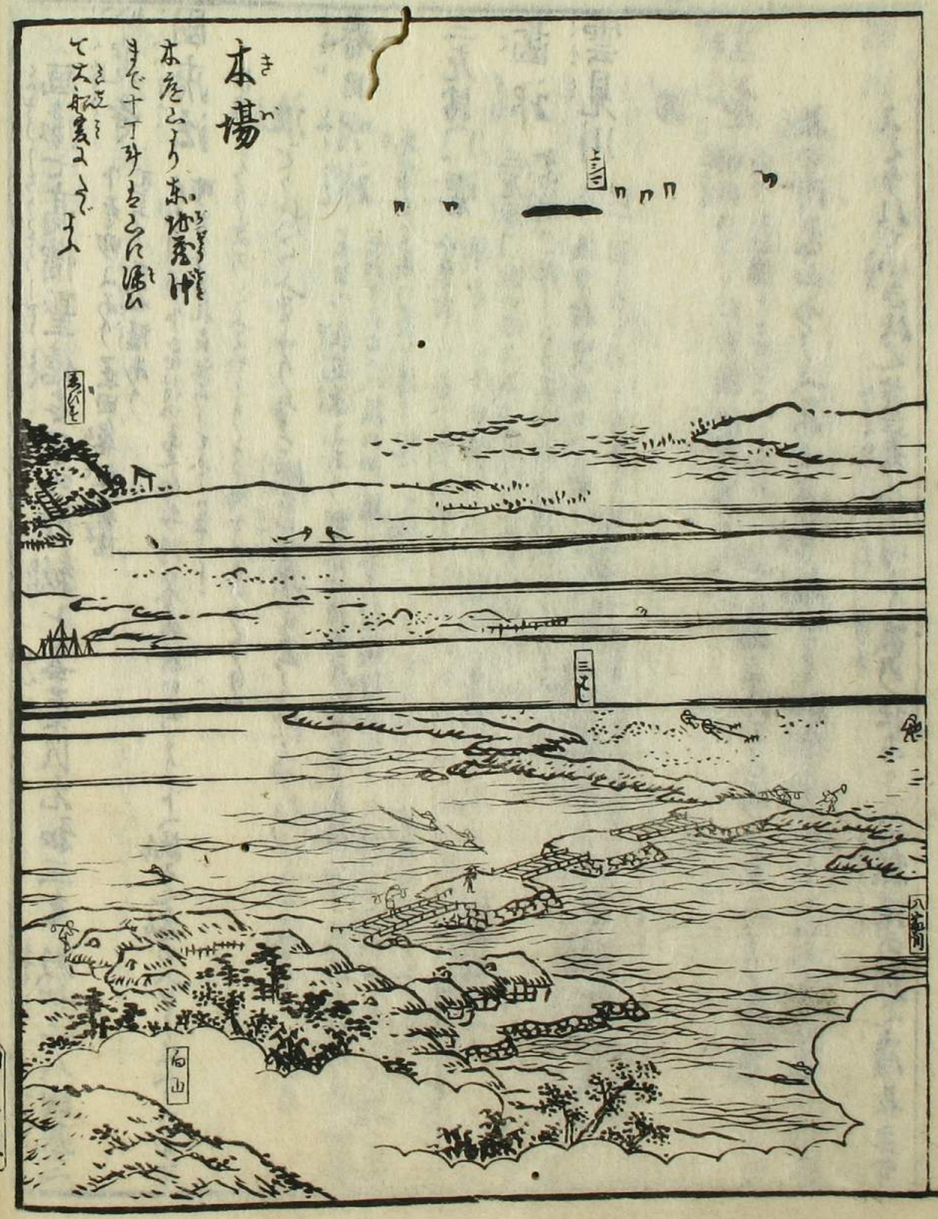
天満宮 旧名池田輝政内室建

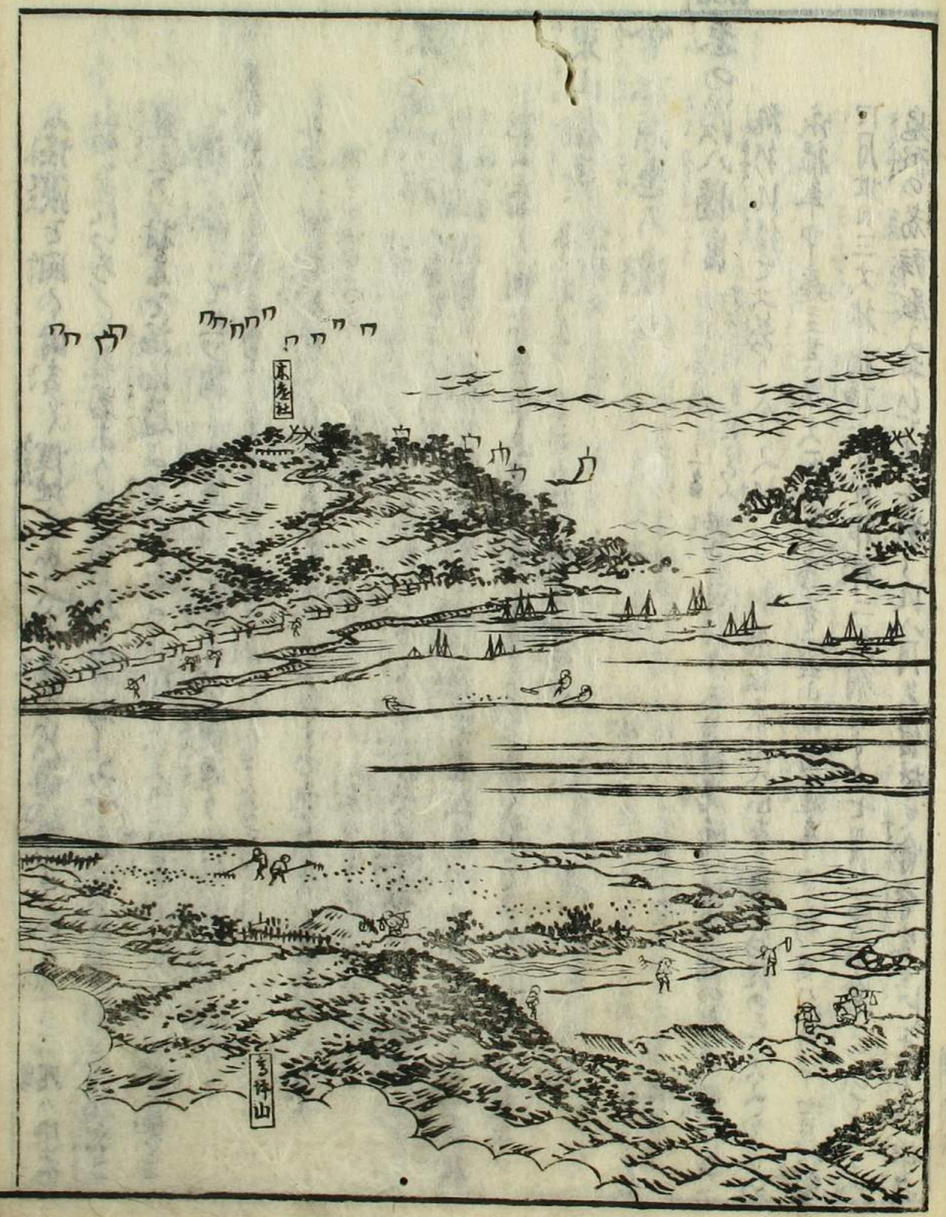
愛宕山 旧所

元補

國府寺故家　姫路の町より今の國府寺氏なり歴代此地より住して當時より凡三十代連綿と
して當家に至れり（相續一統の名字を稱す）
家數三ツ屋人皆三州より此附よりて
名氏明確と号しがたし（或は云ふ）
松の枝ぶりも宜しく
枝ぶりも宜しく
故に今に至るまで
枝ぶりも宜しく
故に今に至るまで
枝ぶりも宜しく
故に今に至るまで

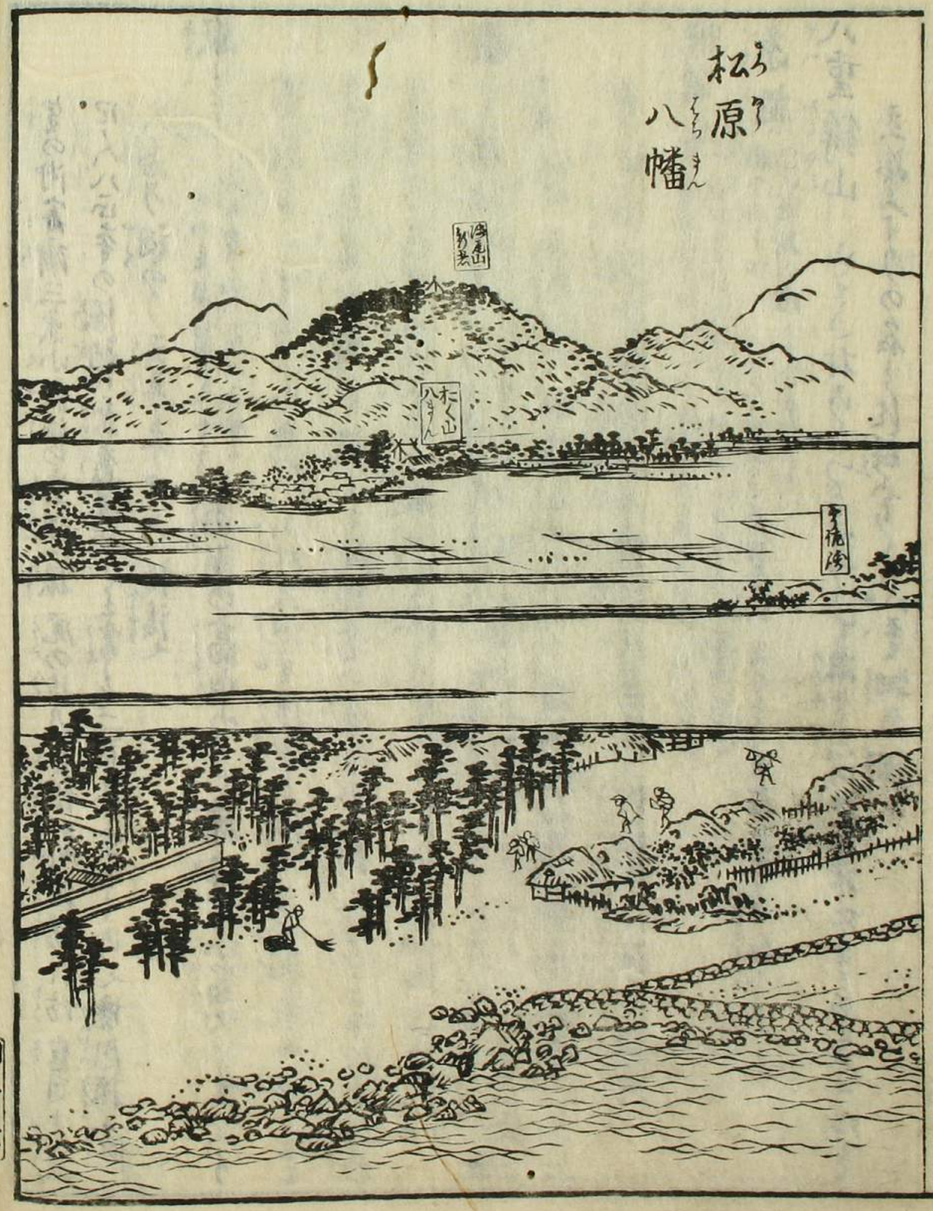
本場

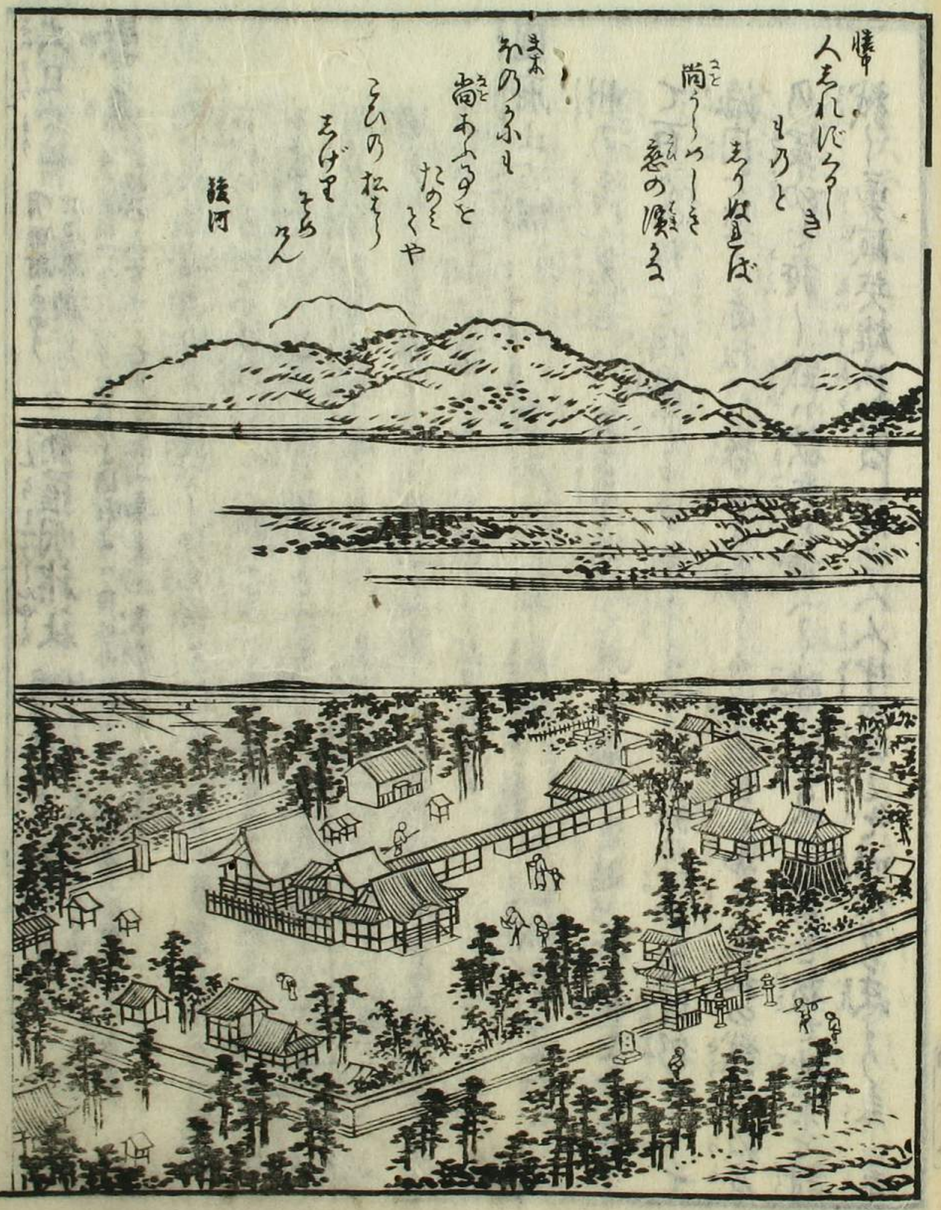




み堤濱を開く附多く埋地となれる本庄の北南隣つゞきしより巡りて北の
山のすそにいろ〳〵の岩あり
建立の材木を流泊迄の集むれる本場とぞ。八家川とその小さき橋を架
て橋と流して三ツ橋ともいふ室浦なる砂をへて濱通りの往来の間候なり
家数 きゝはらふて両のかりやをきたるまでにて
をやせね濱の両いうくんぐもきこはとうぬものぞたりくれ 俊哲
按るふ永享の年〻後教の射こよりて濱つゞきいぐ本庄の名考へあるべし
本庭明神 此地の土産神之事神八幡松原の別宮なり 元和元年本庄開発の長者三本久右衛門宗宣
別本小三郎 造営ありし仮殿の後宮に代の遷宮泰政造附之宮儀元年之尚社
記文委〳〵例年九月十五日雷宮いと華麗より灯を捧ぐ数百人六月廿九日祈祷あり
東山稲荷 東山村にあり東神社 社司 白矢氏
倉稲魂十座神
會松原悉の濱 松原村にあり〳〵名根尾上のごとし
悉の濱八幡宮 社地基廣〳〵一名 松原の別宮ともいふ
猶約記に終てみおろしの絵 永禄年中建立其後天正二年、当寺霊山坊再建年中約四八正月十七日村郷
正月廿日三大神相撲十五日 悉の濱の者拝殿の柱を割〳〵八月若宮放生會寺家より 古刀破戦
若宮の神寄附 三条小鍛治の宝剣一振 虎の皮の古敷 園心
附人八正寺の縁起 社僧六坊 宮司 赤塚
大意の初あり天平年中の事 悉縁紀と書しと二百年余のものと 楼閣棟多し
麻生山 神功皇后の故事を略く 地誌
苧麻多く生ず 岡の高山より 橘慶の小冠七もつくり
堅義應年中明星院 山院より地を権現と 紋約苧桐殿の相もの
岩ぎり其中より清水あり旱天も涸ることなし 又山下に梅雨松多し 焼落の
麻生神社 大蔵山中より鎮向石御座石安夫石于満塚狐石多し 舊華殿等とぞ
寺そ聖武帝勅願良弁僧正の開基と 今倭跡明星院守護し
堙田井 兼田村にあり 川あり
水足これ神田井の水にて 兼田井田
糸掛 橋下山と切ひらくの間を切ぬきて 兼田村のあとなり
八重鮮山 山まき村にあり
立ならぶすりの名とし 親より八重畑の濱

松原八幡





情

人もれじろうき
ものと
もろ妻こば
尚うらめしき
恋の濱ぢ

なのふね
尚あふみとの
こひのねざめ
もげて
もろこし

阪河

大日本地誌　明田村あり　此辺梯氏～　○新羅明神社　明田村より東國の堂を移るといふ

妻藤　氣田村のうちにあり　信州より此村等の白丹の二藤出る～妻藤の此地より出る丹藤の名稱ありて止る所より妻藤丹藤と號くるなり

武日丹藤妻藤の義信じがたし　古代日本の文字相ひいふ所の字藤の字乃ち此邑を書あり」とて強て藤の假字とは定めがたし　若此村等より此邑の名を採ひいひ妻藤藤間英藤ともいふべきや尚考へ」此邑に當藤ともありとぞ　此間府へ二里半ばかり

國府山古城　三村妻藤村あり　妻藤孫三郎貞祐の居城へ元來此人ハ九州の產之若冠すり大力者ありて其上智略と時め兵卒を服從して百人の勢を指麾とする程の學ありて弘の比武者修行をして海内を巡り赤松の幕下に屬～功を施～武い缺兵と揃へ～礫としい大木を投て敵軍を討殺～勇威英雄比類なし」時の人人中の虎とぞ呼ける　永正八年の比小寺官兵淸の居城となる此人い字多源氏の統亂足田判官倫春孫高滿ノ末孫下野守重隆當國多可郡ニ止住」婿男官兵淸嗣い姫路の城を安濃守職隆の養子となり姫路を天正五年羽柴秀吉公當國へ入給ひ」時播州を陣して毋二の懇志を選びる其後別而長治と厚く～忠貞數ケ度みえ及ぶ長治叛て後秀吉公三木城へ移りぬ小寺曰此城とは申せども山嶽嶮峻にして偏僻の地之ゆへ姫山城い小い雲山巖～と」南より海あり　私の自由兵粮の運送心の儘ゝ是ゆへ師の居所之秀吉公當國へ入給ひ」時播州を陣して毋二の懇志を山之居城へ移り給ふ小寺ハ此國府

飾磨津　飾磨市

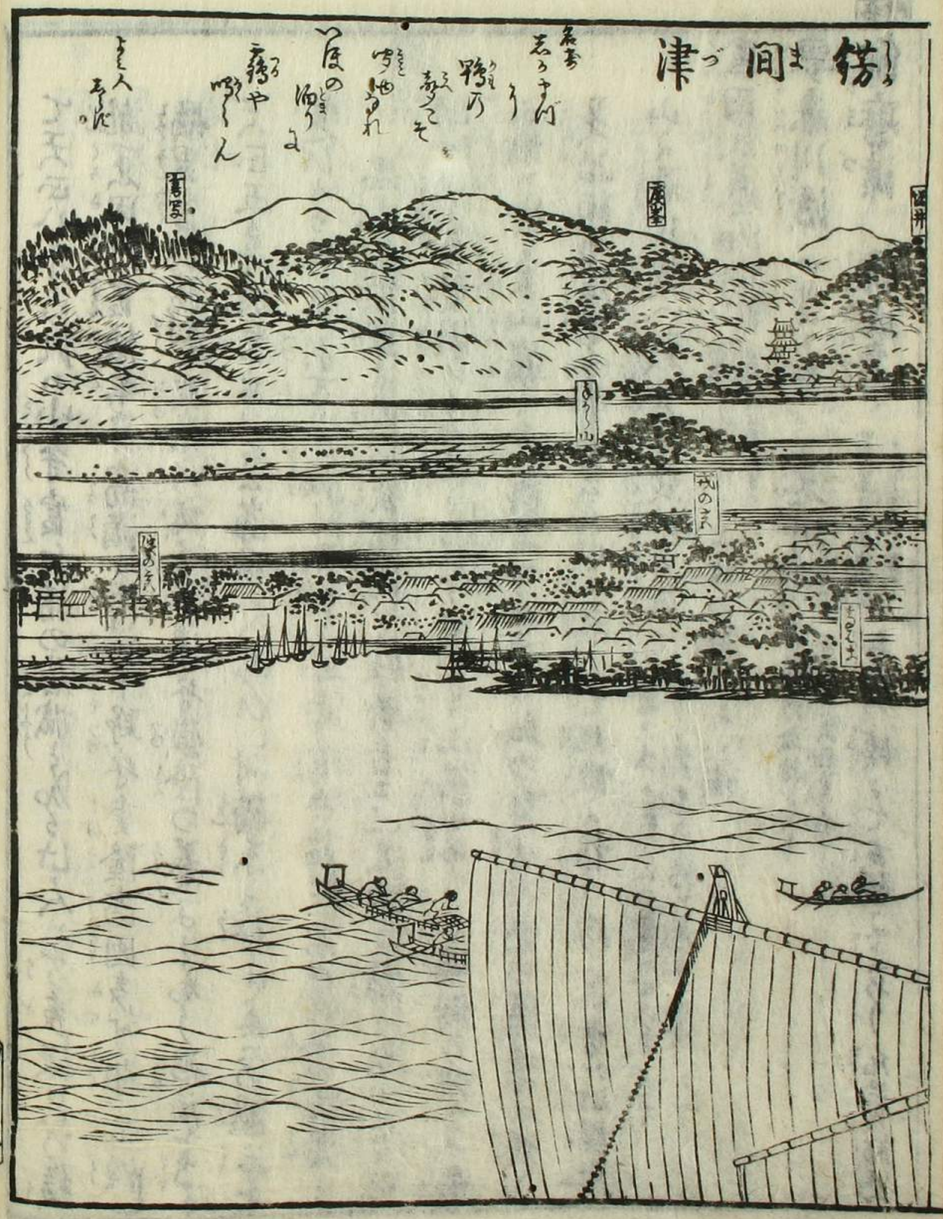
妻藤川渡　市川の下流之

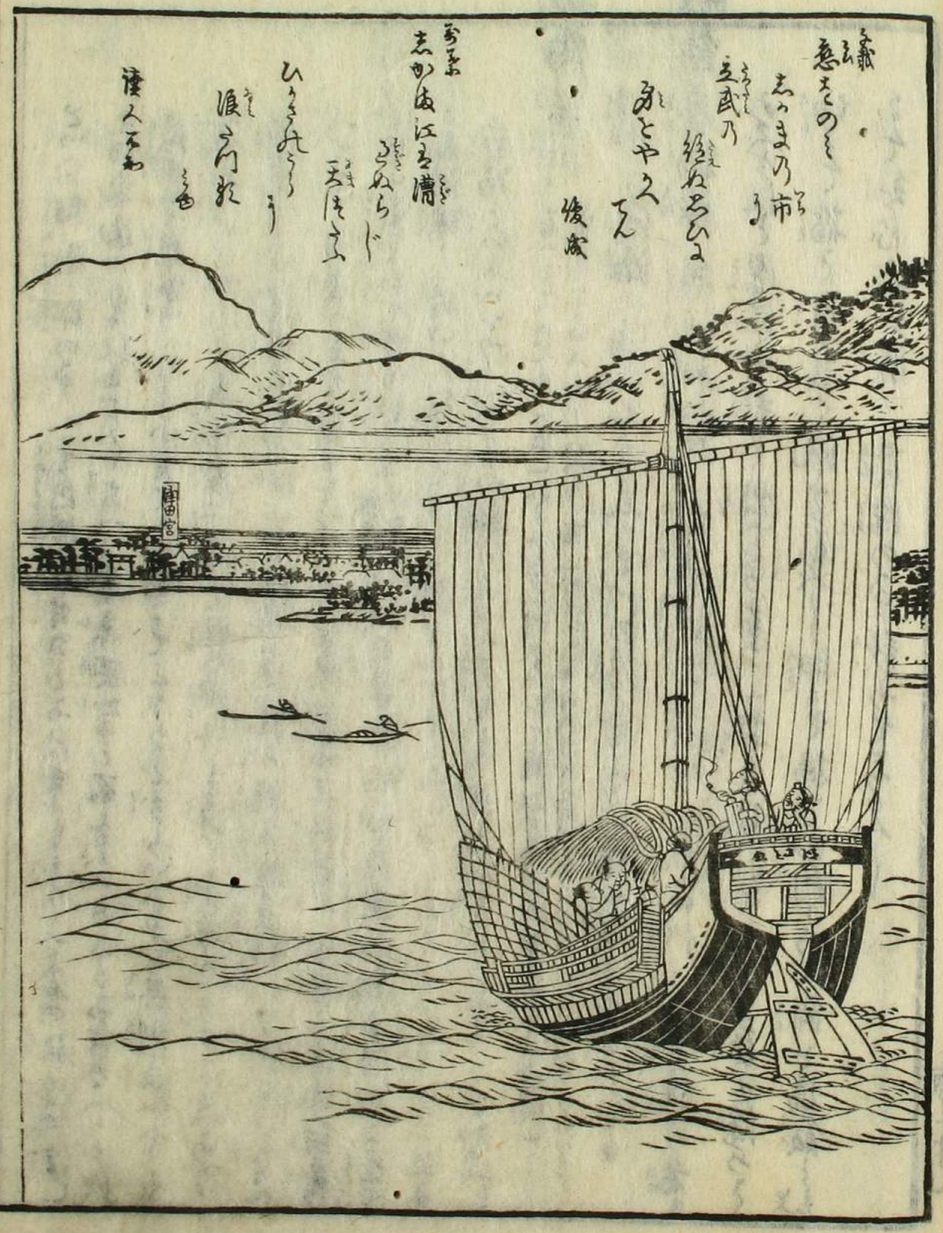
速川社　川西阿彌村にあり　祭神大己貴命

黒田氏墓　國府山の麓にあり小寺家代々の墓ハ山の麓の田の中にあり　すて藥師堂ありなり

古人の湊よりて古歌ありより元若の飾磨

粉間津





所名 飾磨

といへば飾磨一郎のみそを肉湊舟もまねくて名の出うのみ【上の妻藤の葉にそゞく古へよ妻籠英賀と石をいへりしも是也】後世聿用繁くなりぬる小分ていはゞ西は英賀より東は市川を限りて其間を通称多くは出入一夫易農工商を倩へ漁舟も多く奥市は一日と二度あり【同在なれど小異世の家多し】飾磨の市は清水納吉槻苔の紙八雲御抄にも見へて筆店並べ立て賀るといへり日本紀弘仁私記に曰高麗人餅煮の市に来て【餅煮入の英賀日記にも見えたり】酒醸し酒の人競ひて美き價となれりといへり【つもありしを英賀妻籠同古への一名なりと知べし】市場といへるは今も猶ありし石ゆゝく名づく

飾磨川 古への大川也【今は市川をもいへり】今雲見川ともいひて通称のみ後世也【栃さうなり】

まゝ川海の海より出うる志らまの縁ん日よこそ我妻やまめ うた古歌

所名 飾磨楊梁 当津細江町より納屋多し【餅煮入の英賀なり】酒醸し酒の人競ひて美き價となれりといへり【つもありしを英賀妻籠同古への一名なりと知べし】

みそゝれど深江今若く俗へうる家也】捜るよ兵いく度も楽よ深ちく

曰て搗く唯なく深うるめべ〳〵曰て搗とかいふ餅と搗飯ともいふ

そ知ぶ【濃き蓋深のうみ歌みてもるべ〳〵

別名 我妻 新續古 たのまもとは志ら海のからのをとよあいそもてこそ深くおもへ 通経

新六 志ら海うる志らま小俣る楽富いろあるうちの濃深ぜんくい 後成

天満宮 楽の天神ともいふ飾磨津にあり近世也【今は納屋町と称す】 天満宮 楽村よりもう一ツ前を楽るとう 先奥猿楊の神之楼門川てる丑

飾磨寺 遊園 今小串にあり善仲を安置也長山飾万善師寺也【楽名所記に近世伽藍ともみえたり】

清水 善仲の傍にあり十水の外にうしとも 国中第一之近世伽藍ともみえたり 結構に

御幸橋 御幸町雲見川のもれ架る古橋あり 白川法皇も花山院も幸ませうし 古橋あり

道辻祠 善中より中祠御社【今辻祠のみ】

いろおく若い社も大きくて年の事ちは男女陰形の偕物と納て里民

の男女名【男名】のもの山詳殿ともおて安産

又宮守る竹の枝をんで後ひ〳〵其枝ちれて妻妾【妻を撰ひ婚ともいふ】

の吧ゝ形尚ちかうるもをま曲鶴ちるて猴つり人のいとく絵うう

孫三餅 善中よりて今ようろ若候家の取僕ともは餅をうて喰ぜ

もとよりもいろまりまれかちん今【是】てもるよ

津田細江　津田と細江との間の川を云ふ細江の湊の転訛なるべし若い川ともいふ近江八景の一なり

　　綾古　もろ〳〵に風吹い波やえんと結ぶらん津田の細江の蒲の穂絮

　　後撰　五月雨い津田の細江のをつくしも久しぬも深き恋かな　赤人

津田穂蓼　津田の宮の小二丁斗あり百人一首に三伏も生ぬ夜ふけて寝ざめの里の蓼の穂の露と詠ぜらるゝ舊記ふるく仁治二年七月始めて書写山勅使より権古帝十又年忌の日孝紀の尼公の為に宝倉を寄せ給ひ祇園の宝倉の事始記るふ神社を定めて神供の事始記し事と宮食の祭式計村を名物のこゝろ

宝倉村　龍山の中にあり権古帝十又年忌の日孝紀の尼公の為に宝倉を寄せ給ひ祇園の宝倉の事始記るふ神社を定めて神供の事始記し事と宮食の祭式計村を名物のこゝろ

　　ことひうしのそ年けの酒よとしむらく廉潔の徳よふぬりの下略

（山）小山より廣峯の

・

若一皇子権現　志川村にあり　長谷山観音　八幸畑村にあり　同じ寺の奥院なり

銅山古坑　八幸畑村の中にあり始め銅を掘出せし古坑なり後ち本田安濃等の掘出せしと云ふ

・

旱田苔清水　志村のうちにあり小さき水溜なれども夏日も下流うるおせりと云ふ

庄山塚趾　園心の二男孫若宇奥能る息女能　赤松奥村　山名宗全の居原伊記郎小寺加賀守　山服左馬門　各援ありし

白國大明神　國衙庄白國村にあり　祭神國方姫命当國記之宮と称し延徳年歴止

津田の里　延喜式神名帳白國神社

津田の江　同上

　　もろ〳〵の蛍跡とゝめ人皆老ぬ江水の月

加茂大明神の餘流ともやし鳥羽院の御宇の勧請なりと云ふ

石室　廣峯権蔡白國村にあり深さ八間口二間中に石の祠ありいまに存す白國と云ふ

高松宇　白國村にあり　延喜宗幸為聖親音後堀磯院の御宇当村の守護白國神社

・

・

・峯相記曰記曰宮白國大明神山門感開國

飾西郡國衙庄白國村の社い廣峯山神宮寺の新羅より御幸して新羅より帰朝の時御船の御舵を取給ひし人皆老ぬ江水の月

石室　廣峯権蔡白國村にあり深さ八間口二間中に石の祠ありいまに存す白國と云ふ

高松宇　白國村にあり　延喜宗幸為聖親音後堀磯院の御宇当村の守護白

國神社　延喜式神名帳白國神社

津田の江　同上

　　もろ〳〵の蛍跡とゝめ人皆老ぬ江水の月

加茂大明神の餘流ともやし鳥羽院の御宇の勧請なりと云ふ

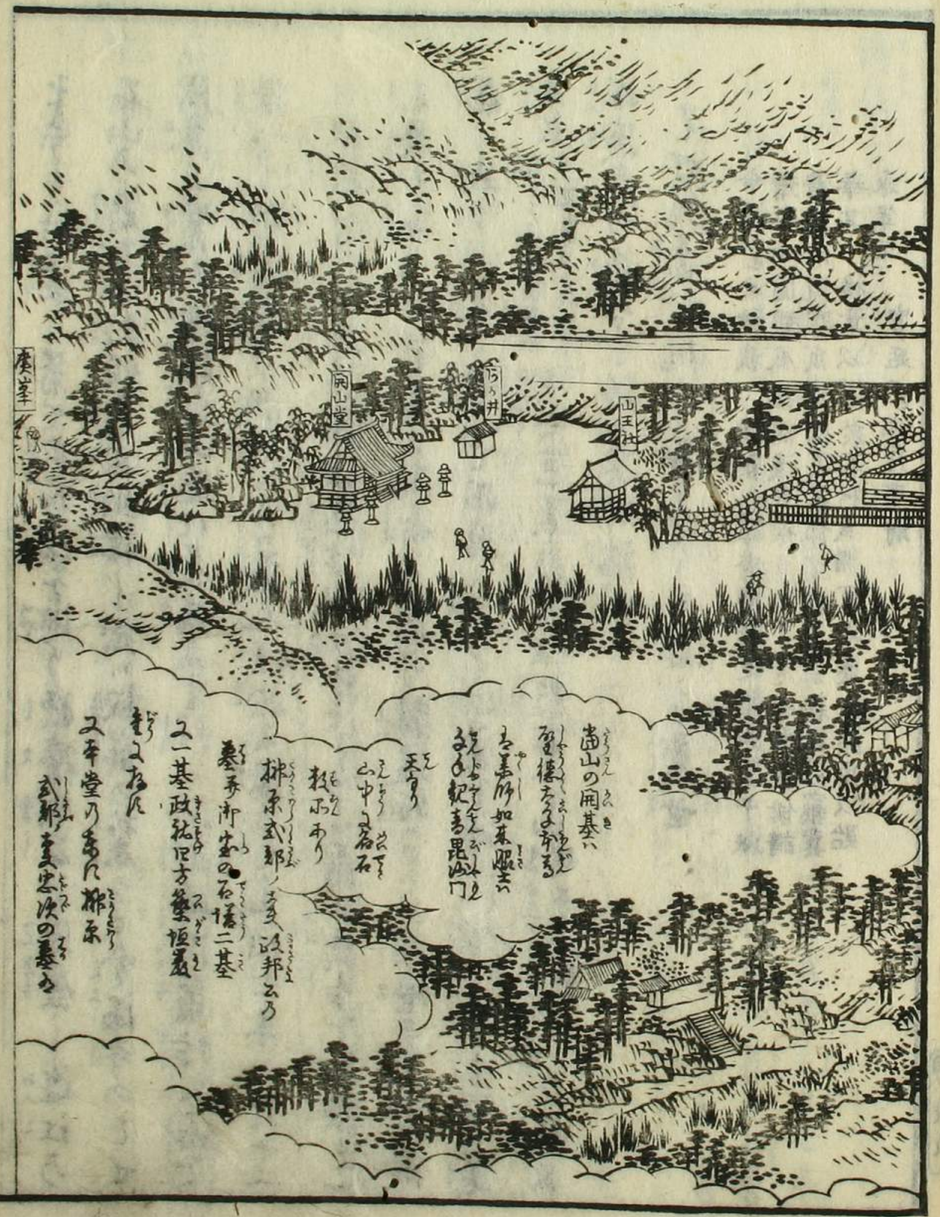
双巻二寸三
巾をす三分 紗嚢 蘿生本綿 抑風蘿堂ハ增位天石山の梺ニ□て奉
慶石より百歩ゞり上なる谷にあり其側をこれい発校森と
□て種の李幽ふきこ本草家ハ洞水ヒ方ヨ流ヨ後い廣嶽の社
臥書寫山の山寺連り若ハ橘麿渡飾麿宛ヨ師浦沖の中川
ゞうけ島渚浴島根い本の向くよりつ□尼ヨ市川右ヨ梯渓川
陸ふは客の両図ヒ淋ゞ□谷れり」ミーも此一室ヨ倘ゆりて長
安名利の塵を離ミう

芭蕉翁箕堀 增位ふの梺 芭蕉翁箕ノ谷ふう

て松尾甚七郎ヒ号ヒ壮年の臥官を辞ゞて江府深川芭蕉菴ヨ
止住ゞ名を桃青ヒ改め寄倘
弥生の末奥羽ヒ紀御ゞ加賀国ヨ入北枝がりふ旅舎ゞて跳着の
方ヘ毎ふ附綴別ヨ菅箕ヨ己が数句ヒ添て翁ヨ贈る

卯辰集
白露もこぼさぬ萩の枝折哉 北枝

善通寺



増位山随願寺醫王院　白國村をくの方

寺傳曰

ちよ自像を巖上に彫刻し給ふ今の本尊是也

傳云行基菩薩の出生村より常に附属を彫刻して自ら開眼如来日光月光十二神将の像を刻て安置し今の本尊也

行基の作法勢法師博識にして奥院を開基し給ふ

聖武帝天平七年癸巳義淵の後昇に命じ給ひ法相の勅号を受く大般法相を草す各宗ともに増位山法輪寺醫王院の勅号を賜ふ此時法燈滅して封境廣大伽藍山巒こゝより後る那院七堂甍を並べ最勝講を修行す

傳云行基の作る所霊木にて天正年中別不長治の兵火に罹り堂舎悉く烏有となり僅に行基の像と奉安して姫路及び行基の像を奉安して姫路の西嵐山寺院を而地に修補し今乃ほく

諸堂寺院を建立し完全す番匠に方々業し奮勵之を營む

有明峯　南山東の峯境内峯を望む古作宮を祀

傳云この小一里許ありて行基菩薩の建立し給ふ寺院の跡あり

孫高峯

細石のいとをるしが擂磨する孫をる乃峯いやるよなる　元輔

そゝり汁簑を着て大和路を巡り須磨明石を遍歴し近江乃石山の邊なる幻住庵に入り深く嶺嶽の林泉を愛し金湯寺のたゝ岩屋に登り又園城寺の邊を徘徊し湯泊白山邊に愛庵を構へ汁簑蓑の調度いろ〳〵落人惟然坊と誘ひて元禄七年十月十二日難波にまかりぬ其後惟然坊朝夕のたよりを和漢とし本吳をおもしろく云ひ囲居し雨の朝夕の旅途物ごとい橘塵の千山へ附属しぬ千山是を撰へて姫府に帰り汁簑を神と崇め塚と築き碑と造立し蓼〳〵の丹頂をの中央芭蕉翁尼惟然右千山るさ三尺基石二尺の碑石う鐫を姫府侯の数句を彼の碑銘に曰

そせ花茶や風うを吹ても名を惜世

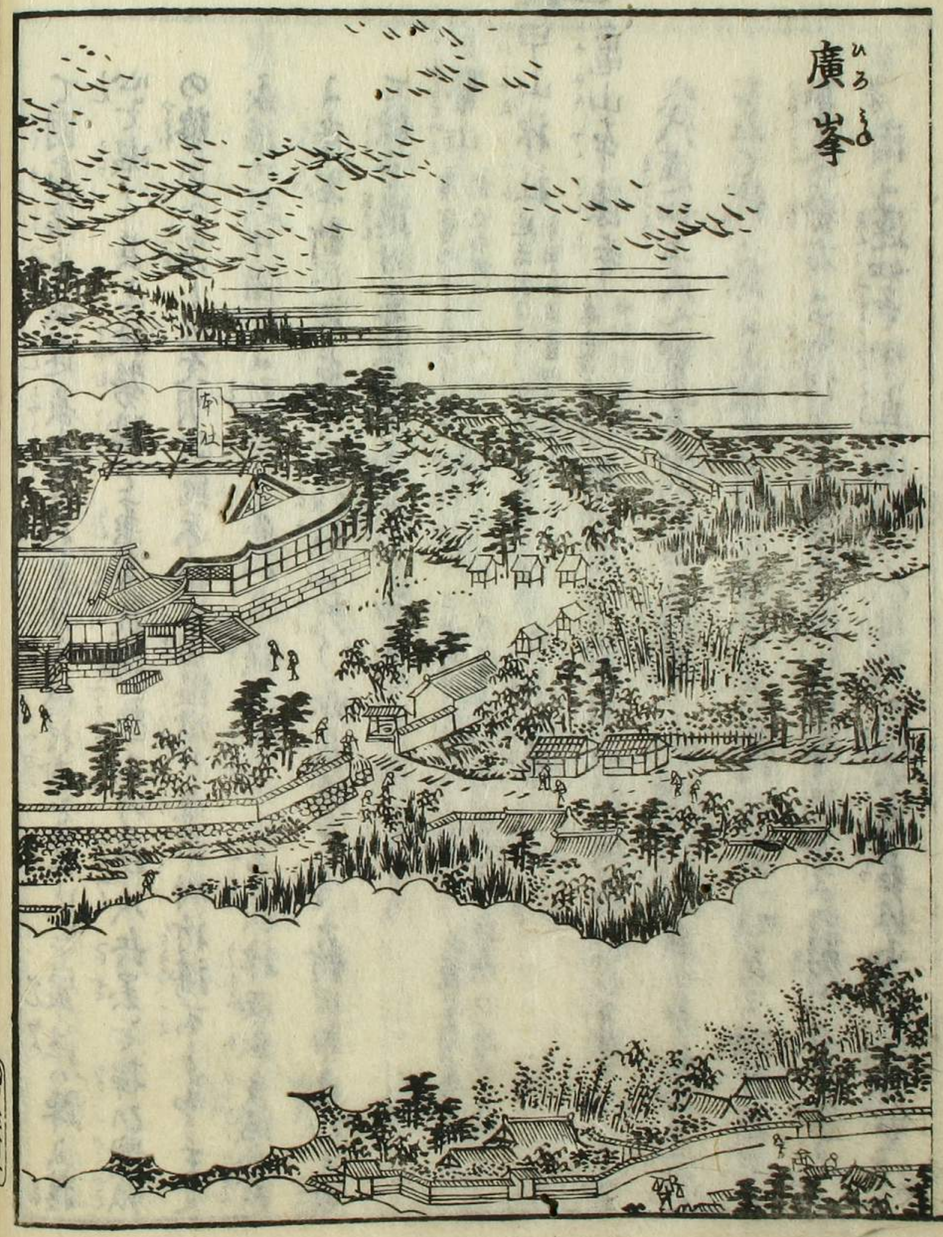
今茲己巳之秋我　候新入城府聞政之暇迴駕于此
増位山随観風物偶溪邊探蕉叟之遺趾而裁俳諧
滑稽者流寒爪傳聞其事仰望德輝景慕風彩窃冀
奉其　雅章以置於不朽武備可之遂叙其由以貽
永年云　寛延己巳九月中澣

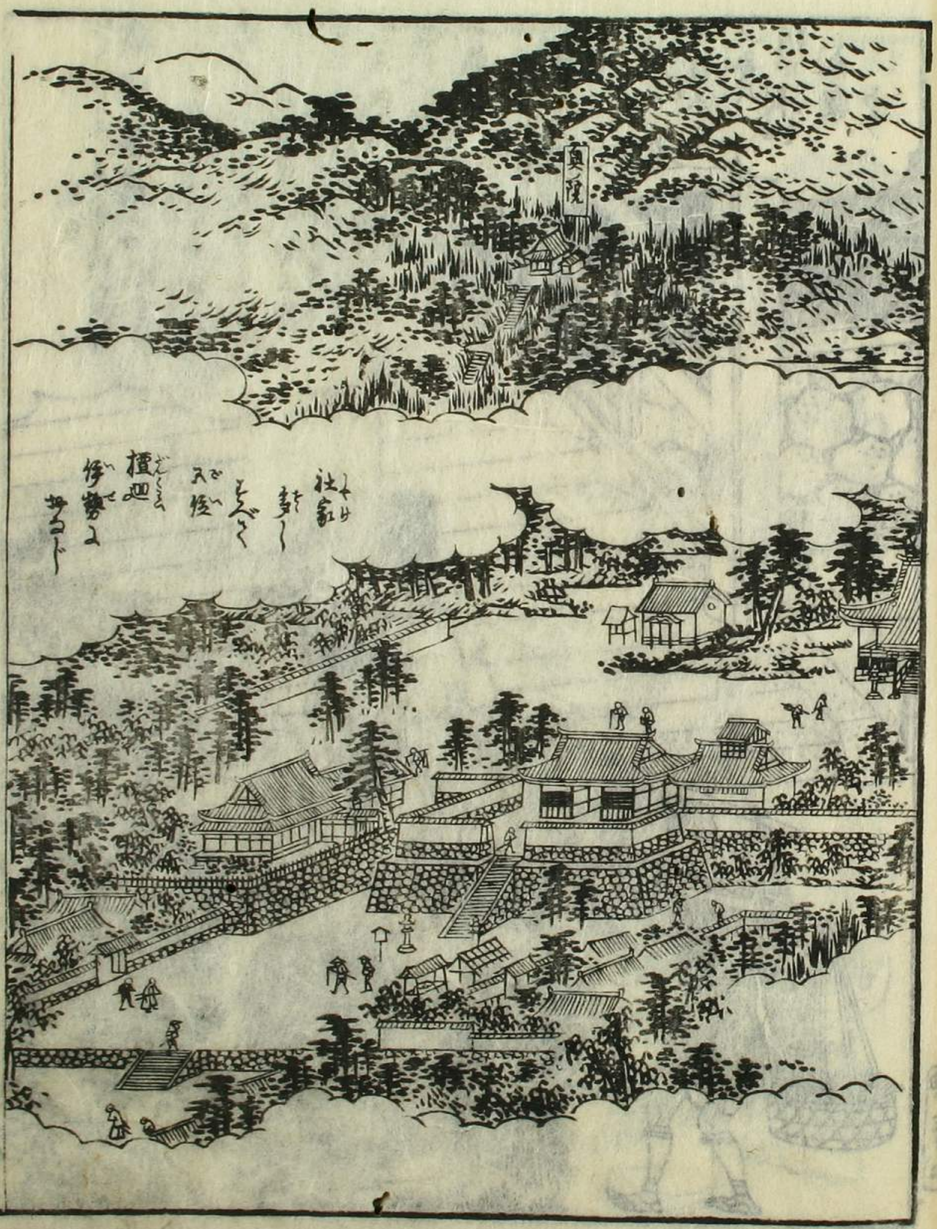
廣峯牛頭天王社　手村村上にあり　祭神素盞烏尊　天照神御兄弟
三大神八王子猶社よし白幣社　古伝に軍殿大己貴命　地養河藤原氏祖神　天社
又祖護王所冠若殿九部の神完全之歟社の御祓應ハ聖武帝天
平五年三月十八日吉備公卿朝の時し地み於て素盞烏尊乃神
託を蒙り奏聞て上奏し勅をなりく四六年ハ神社を造営
以其後園融院天禄三年西峯より廣峯ハ遷ゝまる厥后貞観
十一年山城國ハ遷を治承祖旧の社地ハり　○二代實録十三　貞観八年七月十三日
授播磨國正五位下　○峯相記治の祇園遷
そとハり　九部の神完全の社の縁ハり数九ツ元のニハ式干の社とハり数残を脱ハ
廣峯古城　大神宮廣峯　ハ遺蹟あり　城を
の苗裔よ」て廣峯南麓より武勇を励ゝ兵卒を好
で建武の乱ハ吳利ハ属ゝ系合戦ハ数度の勲功を施ゝ将軍家の感
状を賜り剰へ廣峯一應職を蒙り當門繁栄して内ハ社檀ハ於

て國家治平武運長久を祈り外ハ村御ハ業として軍法ハ陣ハ粧
心を凝ゝ其上社務職を兼帯ハ国益一山乃社人兵卒を揮ひ闘戦
の勝ひを占ゝハ文明の比赤松が西播磨を攻ゝ御祈禱不ゝ
永禄の比中國大ハ乱ハ至ゝ赤松が一族も國郡と争ひ神西永良城合戦
ハ廣峯新に即座城乃傍ハ到ゝ永良城を守ゝ新に即武功ハ依
て歌を退け赤松家の感状を賜る今ハ傳来せり

白幣山　廣峯のたくまり神　平野寺　平地村ハあり古へハ東院西院あり東院西院ハ元明帝の御祈
願所ハ聖武帝の御祈願ハ西院ハ額ハ
甲山神社　延喜村ハあり　式内神八幡神明ハ同
亀山幸徳寺　亀山村ハあり　西幸教寺流　寺領百三十九石余開基親鸞聖人ハり券
八代蓮如上人ハ實云上人を召て御代ハ
を召て代ゝ宝ハ止職とせしむ幸ハ阿弥陀如来　上人ハ九代実如
聖人の歌右ハ幸行上人の像餘間ハ聖徳太子の影十字名号　蓮如　上人
を南ハ蓮如幸中真蓮如上人自畫の像を安置ハ小ハ神拝堂　祇園ハ葵

廣峯





御田植囃子 二月三日

八日御神楽 能馬御田うえ
囃子こんてい 鼓あり
又九月二の午日 神楽 三基
同月十四日より 悪魔祓
の神式六月
毎日 氏子
の振 十月
十五日
御相撲
同廿二日
御濱立
又毎月
朔日 神を
音楽
あり

播州
音楽
不して
内裏
楽所より
こんを伴
以上四箇所
宮祭礼の御神輿
御振物の神式あり
之を囲の人民
伴勢氏宮の如き月
うるし塗宮を清をるの
不一つ九風俗なり

市級あり次に集會所茶亭あり其外堂舎莊嚴なり　今寺院の繞る亭のみ存す巍山の流のごとし寺傳云

山の長くも久敷名を施のこるは名分重き

笘編英賀日記に日本徳寺の西にあり永享十二年結城合戦の時赤松筑前守滋貞西海の軍實の上洛を汚くとゝめ英賀遠て兵粮の外に金二千疋を献ぜしかば感賞の御書ありと云

高岳神社　略して岳神社と称す　祭神仁徳帝武内宿禰二帝武内之後裔盡敬天望　譽田明神　本應神

鞆田祠　安田村にあり祭神平清盛島姫　延喜式内　安田村にあり祭神二座

手柄山　一名三輪山と云　撰名の地なり　今荒廃して実法寺村本帝

山頂甘座社あり大己貴と祭る　山傍姫路領分

徴ると刀祢よりの柄山権現と称するは是なり

八荒神祠　小祠あり古人レヤカウごとしと

三和大明神　三輪村にあり祭神大己貴命　多柄山三輪神社と称す

君塚寺遺蹟　安室郷今宿村の字とぶ花山院幼幸ひやう元紀三条寺の巳

御館　旧郷士あり後廃絶す

射楯兵主神社　辻井村にあり式内今姫路惣社と　合せ祭る祭神天十柱大己貴命　御所清水　旧名とす　山水を洞進して名とす

手野の里　書写川の南にあり名なり　俗伝曰孝徳帝の保留楯磨幸うし射楯兵主

城山とのゝ下に終焉とつく紙三百九十人の属従葬まもし大塚さを祢。祢ゞ

きねぐ　ゆうつ　終焉　女房　ども　北二条　大九十

人を殺して武士の衣服を剥ぎ取て逃走と捕へ先山里より手野

らしくぐとゝ

萱葺川　一名書写山川　宍粟郡の山中より流出て書写山の麓を経て

うつみはさてもいさゝの機磨ぐ萱葺川の流也てりそへ　黄之

きのまの萱ぶき川をさかのぼるとゝ

書写山　山陽道の南にあり八雲神社茅葺屋根

笠屋　忠見

書写山を地主神

御井隈　書写山の西よりとゝ

そゞぎを地主神

人丸石の小磨　書写日本紀雄略記に日久さり○天皇十三年八月播磨国赤渡の

人丸石の小磨くゝ大力士の者ゝゞが暴虐狼藉を路中の通行を妨げば

坂上良安

又高机の財と奪い王化を沸いざる小人ども吾日小野臣大樹を学して小麻呂が宅を焼其の財宝を掠めとり白物苑出て大樹神をとき奏ぜんとするを聞て追ひくるをさえぎり馬のとし大樹神をとき奏ぜんとするを聞て追ひくるをさえぎり馬の口を捉てこれを斬ふ紀ノ国造乃祖なり

青山河 今詳ならず 稲園 田園の名なり 稲園社 青山の麓にあり祭神詳ならず

妻見園○妻山 遠近の人丸の墓ありと伝ふ

飾西澤 まこものあり 八咫通の路あり

笠寺村古長泰武継季 聖徳をみよ仕奉りて歯州より余部の庄を賜ひ余部八月十五夜の月を見て我を忘れ笛を吹しかば此地をやきれる故に一義をよりて笠寺と改めり 飾西村中人家の後よりいでし古墳なり 泰武継季の墓なるよし伝ふ

笠寺薬師 飾西村中人家の後よりいでし古墳なり 泰武継季の墓なるよし伝ふ 英賀日記に村通妻白為一首

聞ふるも妙ふる寺の光哉

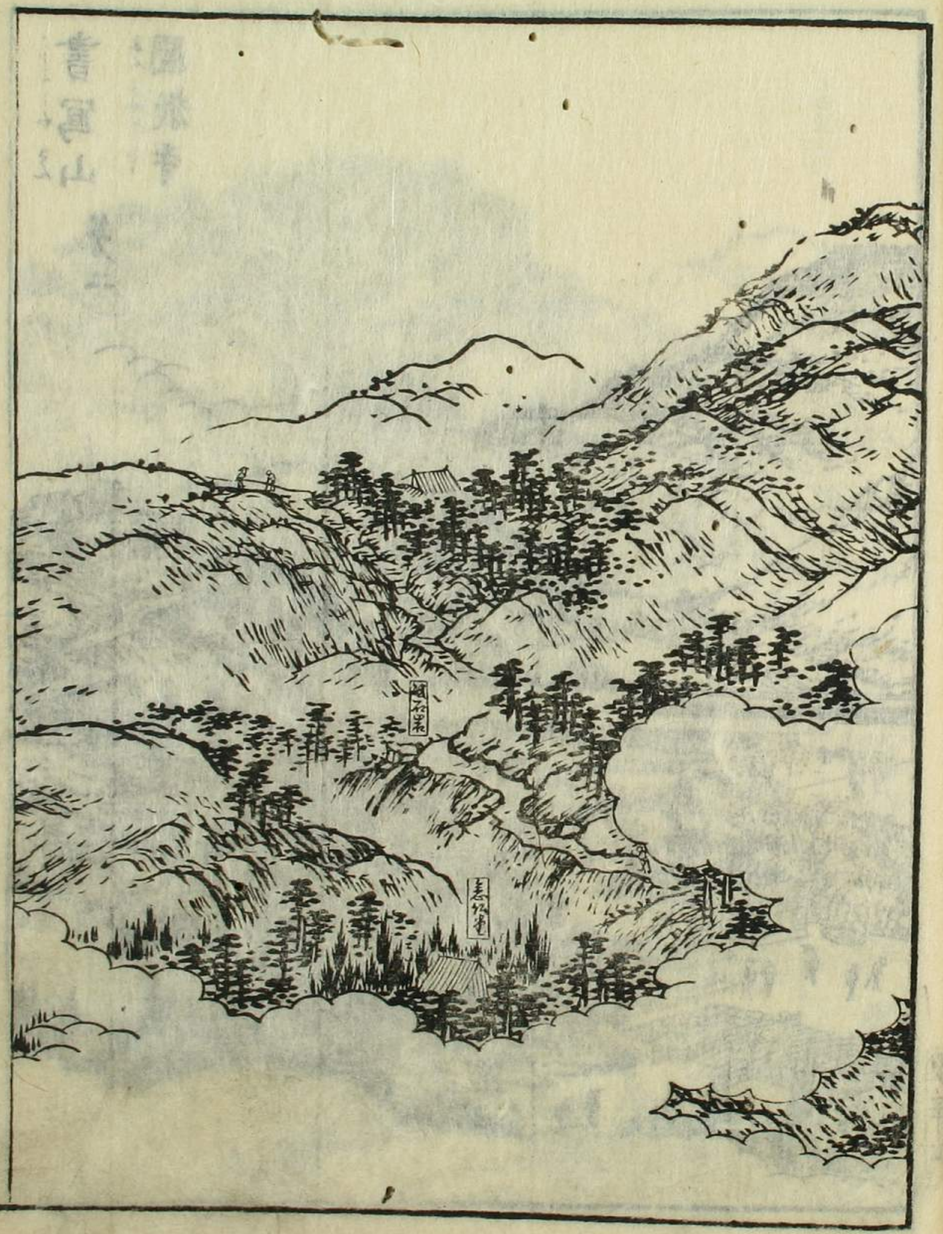
大歳神 飾西村 實法寺 営社を奉祭る 一宮神社 実法寺村中にあり 今小祠なり

法傳寺 余部の庄薗田村にあり建立門流の本執事なり

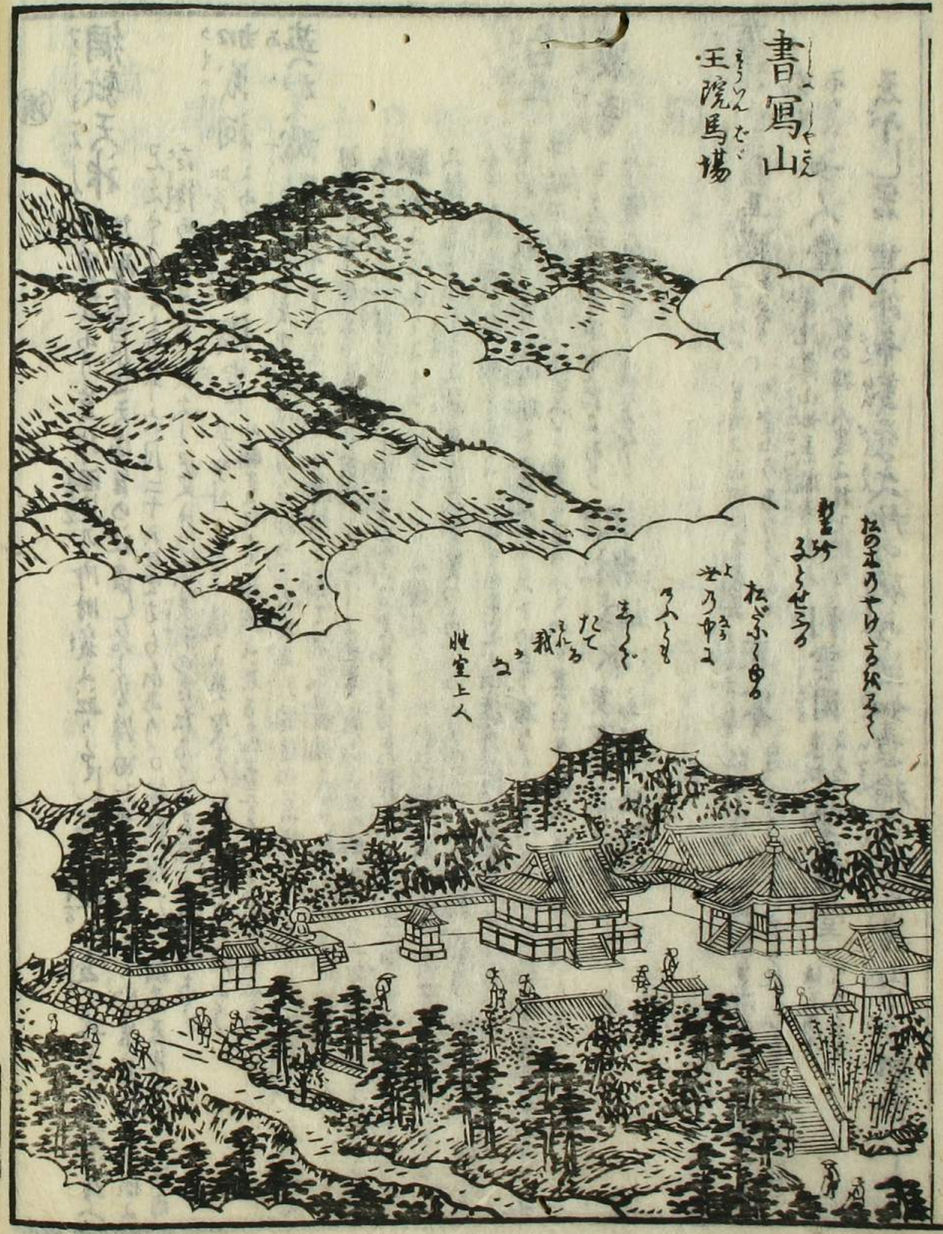
濱

綱敷天神 津田村にあり菅神西遷の時摂津国菟原郡の社を「拝」給ふ時摂津国菟原郡の社を「拝」給ふ時摂津国菟原郡の社を「拝」給ふ

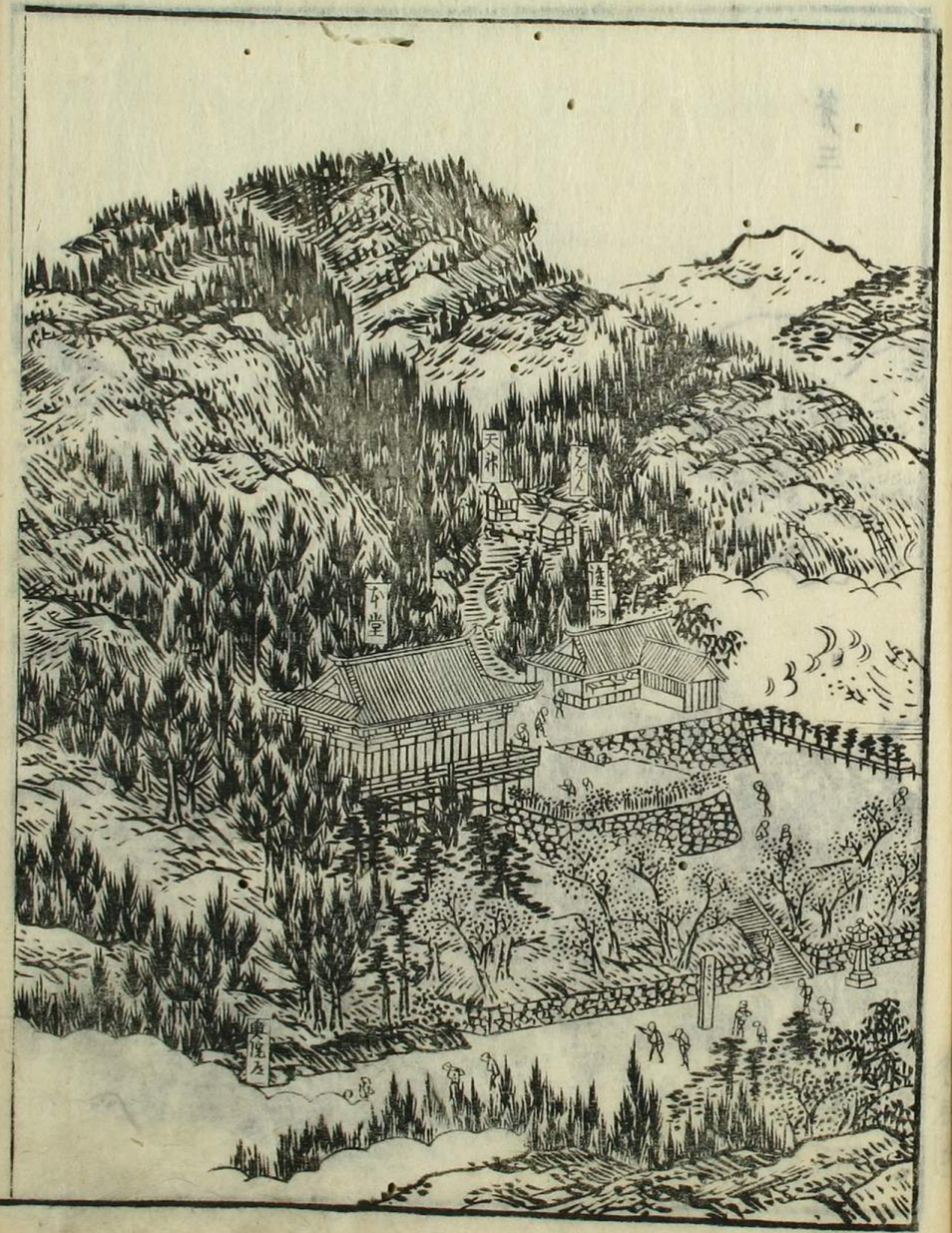
書寫山
圓教寺

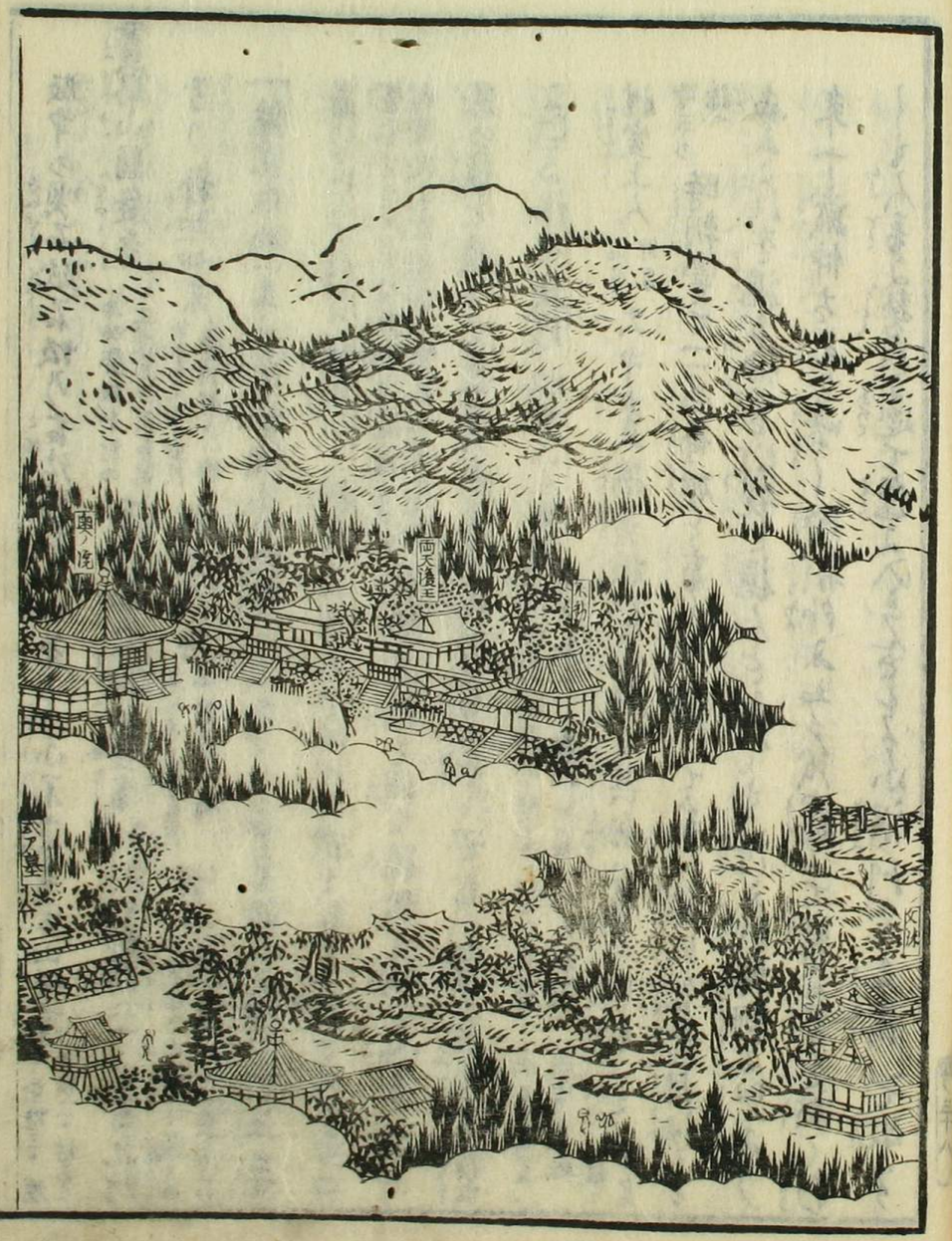


書寫山
性空上人



書寫山 圓教寺




四天王門
本堂

釈迦堂
清水
本堂

坂中の奥石祇石坂乃右洛東教王護国寺
書寫山圓教寺 舩西郡坂本村の上方にあり天台宗
なり 釋迦如来 各法華乃佛 阿弥陀佛 奥の院にあり
一條院永延二年の草創開山の性空上人之本尊如意輪乃像ハ性空菴
居のまへ楊桃の二樹あり一日天人降りて樹を礼ひ偈を纔つて曰
譬喩有生来如意輪観世音菩薩 有時後夢救
衆悩の像を造りて長一尺五寸安置供養 人不知我 無量無数
よとける像今坂内に収む上人頌曰
性空上人 俗名橘善根の子仲丸其幼り後承時朝之仕る 財朝の左舎
時平の 時朝嘗て一つの奇観を雲に乗て家に来り官爵拝任る
孫 無みこれを視んとをれども許さず時朝之児あり
年十歳仲丸を呼ひ時朝外より帰る紙窓より窺ひ杉
しも人なきを遂て盗よみをんさをる小僧ありて破う

仲丸大き小恐る児童仲丸をよびつゝ曰う海鼠くうべしとそこれを
侘る時朝大き怒りて曰此観ハ異相聡明連綿吉の祥ひ
代々佛ひて吾に及ぶ海家寒を破壊るハ家の滅亡を招く邪氷
もうん其罪軽からじとく忽ち首を刎う仲丸
歳心〻 附き年 二十六 人乃ふらざる日州霧島山ふ房ふ結び若幼食服を
忘ふれども常ふ面ふ微笑相あり日州ふ居るふ日ふ年ふ」て筑紫
背振山ふ移り其後書写山を開き寛弘二年三月十日ふ寂ふ年八十とそ
伽藍開基紀録書ふ曰く
著聞集云法皇書写の山の幸ひ
圓せむ附み山勢き地霊悪ふ性空の日懐むつるふ
我像を写しむ衆ふ示り敬み小き痣あり画工をして描いまざ先を
圓ぜひ震動ふ驚き筆を落し信ひ今ふ宝ふありと
○寺宝花山法皇上人の徳を感ふて寛和二年七月小仙洞をゞりして比山ふ幸

ども其後長俗に年三月六日を以て施餓の時上人の遍室山孫歌を誦し法を演ふるをもて終りの事へ施餓の源也開初の頃して像をうつさせ其子親王渡文を書て參詣せしめ上人九十三才の像之を安鎮紀參候右衛門尉泰秀奉行として堂を建立し遷座ありし後醍醐天皇綸旨を以て堂塔を修造ありし洞山殿室上人の門歌堂を開き又小堂沢松一枚を彫て書しう法華一部歯ども廣の他の立大なる其外上人ゆかりの寺へ多く寄附ありし文明元年四月朔日一山衆上下參吉三本麦の時登山

○後醍醐天皇綸旨

坂本城趾　余部庄西坂本村あり

城主赤松左京亮滿祐之弟赤松左馬介則繁武功を旌し永く世禄を賜ふ

其文に曰

滿祐之弟赤松左馬介則繁

右件之輩或忘家業或捨親戚日夜祗候于朕之左右忠節之至感悦不浅仍所賜如件

建武三年十月十日

滿祐之弟赤松左馬介則繁

右件之輩或忘家業或捨親戚日夜祗候于朕之左右忠節之至感悦不浅仍所賜如件

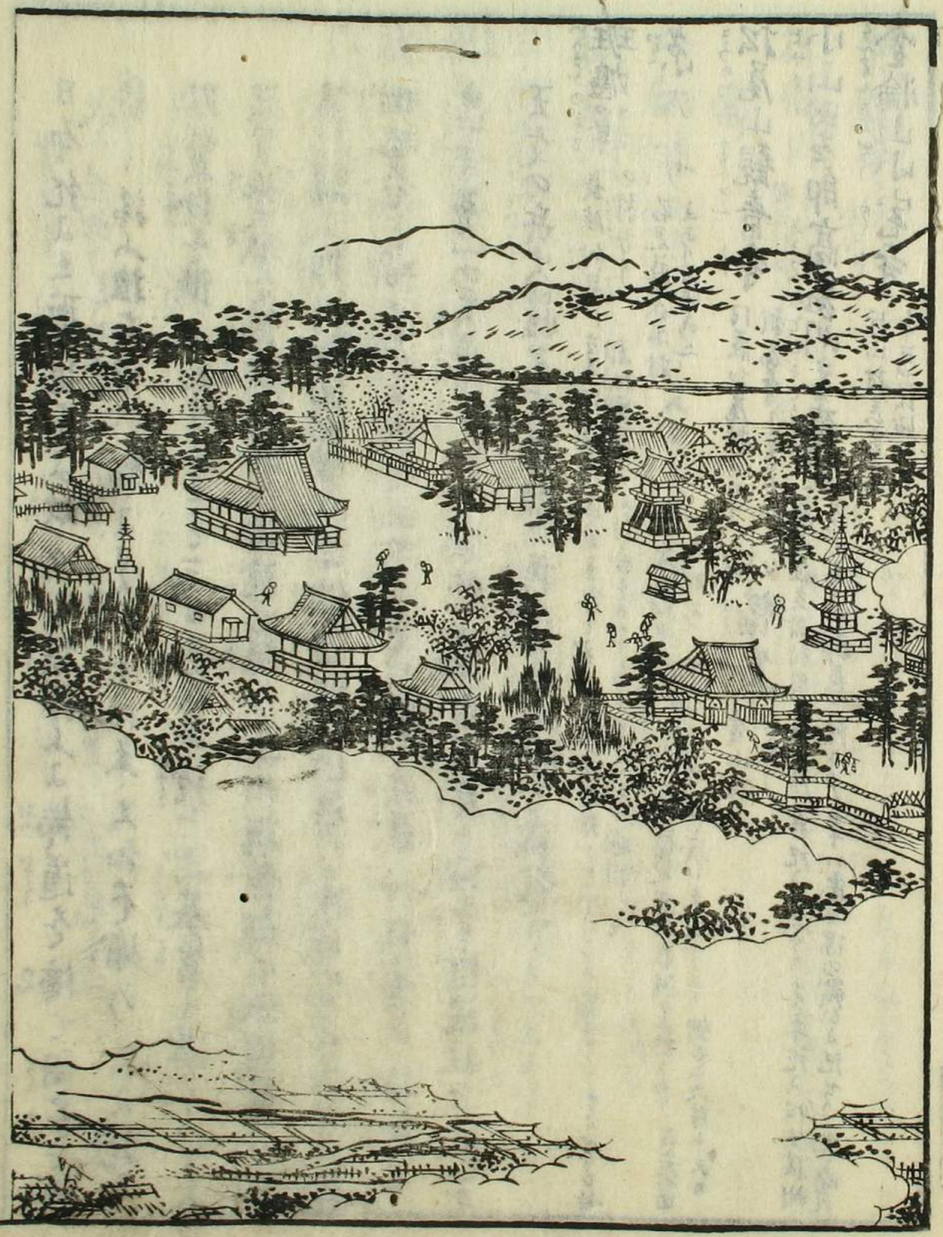
建武三年十月十日

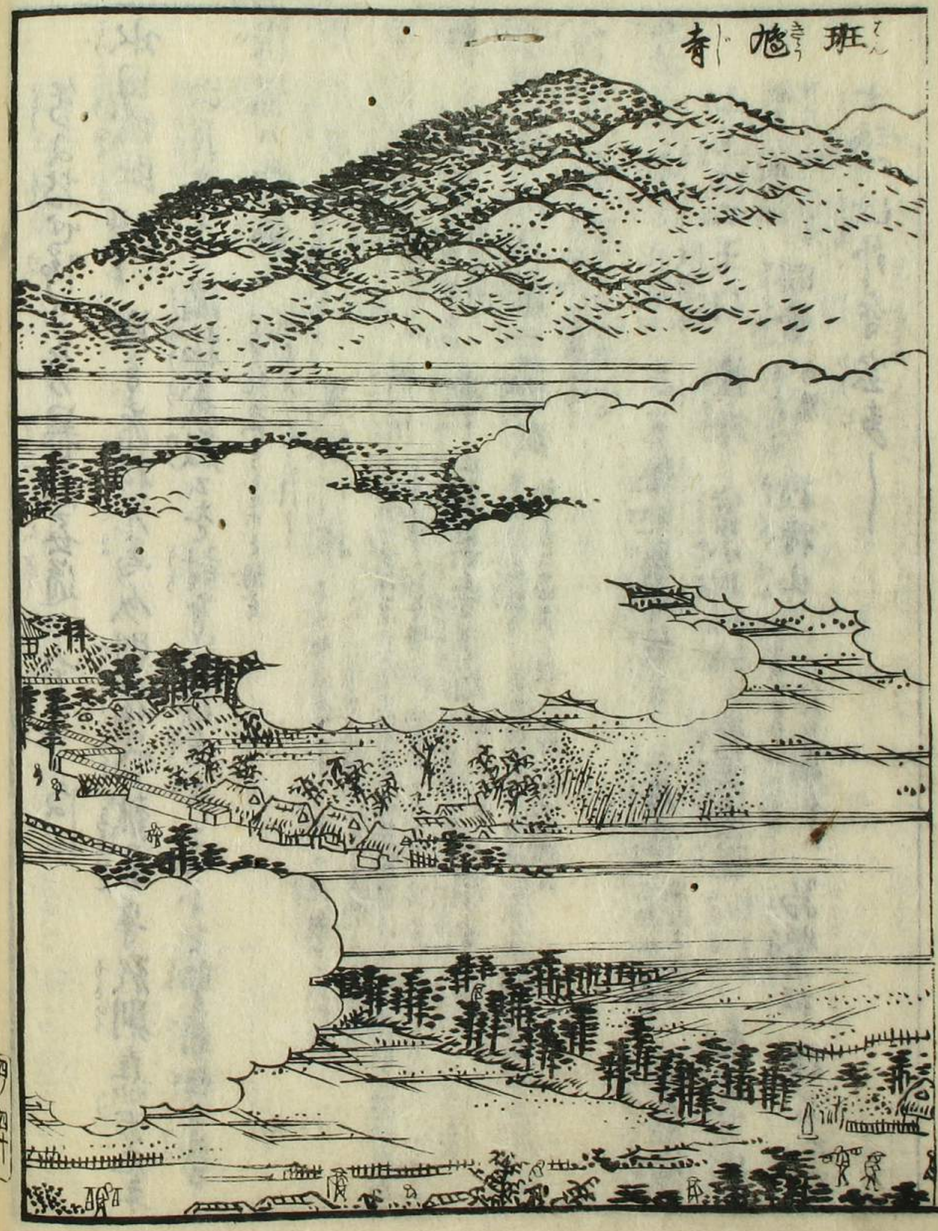
後醍醐天皇綸旨

坂本城趾　余部庄西坂本村あり

城主赤松左京亮滿祐之弟赤松左馬介則繁武功を旌し永く世禄を賜ふ

其文に曰

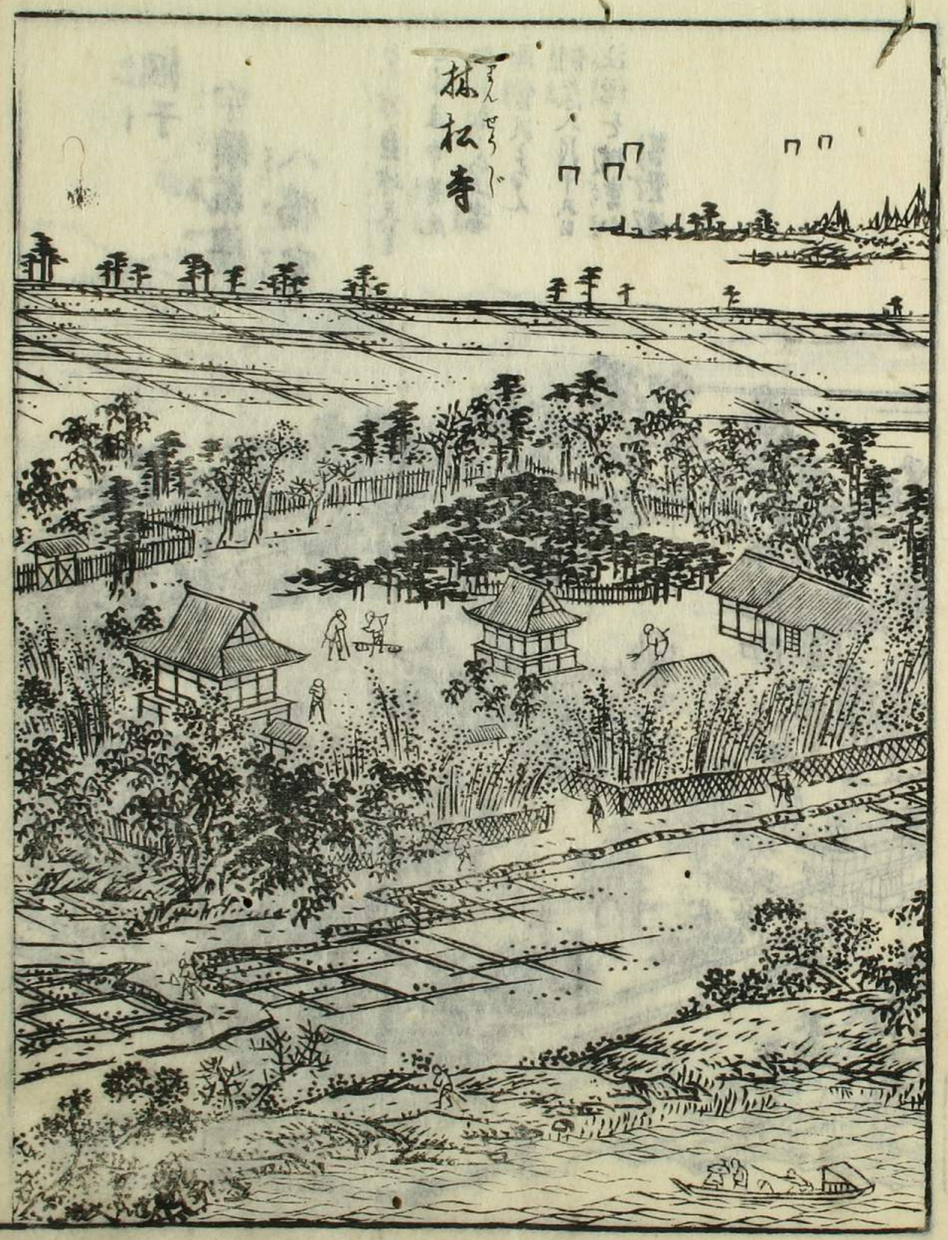




日本紀よき聖徳をも政をも摂給ふよ佛道を濬て國家を鎮
依し給ふ推古帝の勅よりて十に年大和の宮よ於て
勝鬘経を講じたまふこと三日又法華経と圀基宮よ講じなよ
天皇如義を信受し給ひ御感の餘り播州揖穂郡の水田百町をも
て編よ即大和國斑鳩宮よ納る其後此地乃建立ありて斑鳩の荘
斑鳩寺と唱せる御自画世五才の歳い法華を講演の時相る
歯牙第一の宝像としてをる堂よ安置奉若い諸堂僧院壮なりしが
・天文の兵燹まて其後の再営今の如く成就せり

斑鳩驛　長陽組来　○本年記す郡西芝村赤松園心よりかけ合をうるよりありて十余日逗留しぬ
糸の井　石乃荘糸井村よあり伝ふ
松尾山観音寺　旧荘松尾村よあり・八幡宮　糸井村よあり
小山田を即高家村まで変地　廣山荘之圀村の里長の所記乃ごとく本記ありは兵揖州
金輪山小宅寺　斤山村里言家　本記乃ごとくありて郡邑と記さる事い慶安掫の歳ひよ記せり

栗願寺　門前村昔大寺今い小地となる大徳國師出石の地より
企あり甚やしき荒ら小屋を免許あり光徳一人居住を
揮保川　揮保東西の郡へ網渡り揖保川完栗郡よ源ふ谷筋公文川
（濱）
古居　細干郷東西二村よる小地東西の間よ若式ありて転の訛りよ
熊見　日下を田の南よあり里言
宇須岐濱祠　細干宮津八幡宮ノ　松石坡址　猿井の左細干よあり元亀年中
朝日山大日寺　猿井の左宮内村あり　鶴之山大覚寺　細干神の後
林松寺　上く日本にあり寺内よ古松あり故よ名とす　里言家
丁村　猿井の左よる村　傳曰後醍醐天皇圀幸の時茶松家より
・そく丁のもの十ち村ふ撰出ふ
丁村乃人数よりて十六より六十まての者を
人数よりしの有○村中池上寺薬師あり
金茶
みつき物そこぶよりろとかそ金ひよなり
此郷中二乃郷をよめるよみろり



陣屋　沖須村揖保川川尻より九拾弐町の入川あり　化粧坂　家島　揖東郡に属し八里許の海上

或ハ三里或ハ五里あり上ハ播州牧の浦より下ハ讃岐家島まで東西八里南北三里其間大小の島嶼二十餘箇所都て家島と連る陸奥松嶋に似たり○家島の名義ハ江湾三方よりかこひ入口狭く風波なきを以て船を室とするなり船の泊まりしきをなして室と家とハ同じ○室とするなれど室も家のごとく造りいるる洪濤大風ありとも船を室より出すより船舟を室と云人白髪大明神と稱ス。天満宮　家島坂清水　家島坂もけのそこあり旱天も涸ず霖雨も濁らず俗よく法道仙人汲給ふとなり

家島神社　名神名帳　祭神猿田彦命　元慶七年九月九日預

細于宇須岐津八幡宮

祭神應神天皇
當永年中若狹
國人郎ら勧請
再營ありん
創祭八月十五日
社傍を流宮山
と覚ゆ

寂島

寂島
家路の名こそ
みるし海原
あら磯
きつる
蜑たち
漁人ども

玉吟
帰ぬとや浦の
寂しま
くるくる
まこ天の戸
月ぞさしくる

丹薬嶋

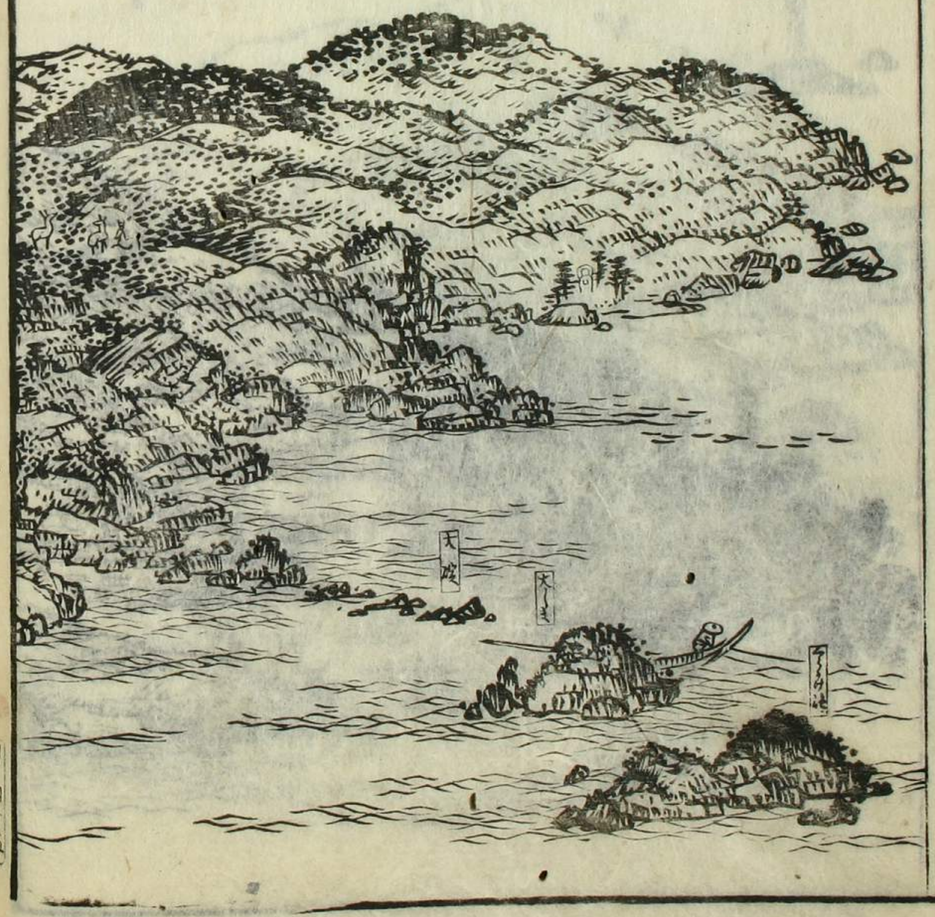
家嶋のあんなうびてたゝ
人家四軒樹木あり
せんこう番人二人あり
清水あり雑松あり
必ず魚を取り雁多く
くゝる

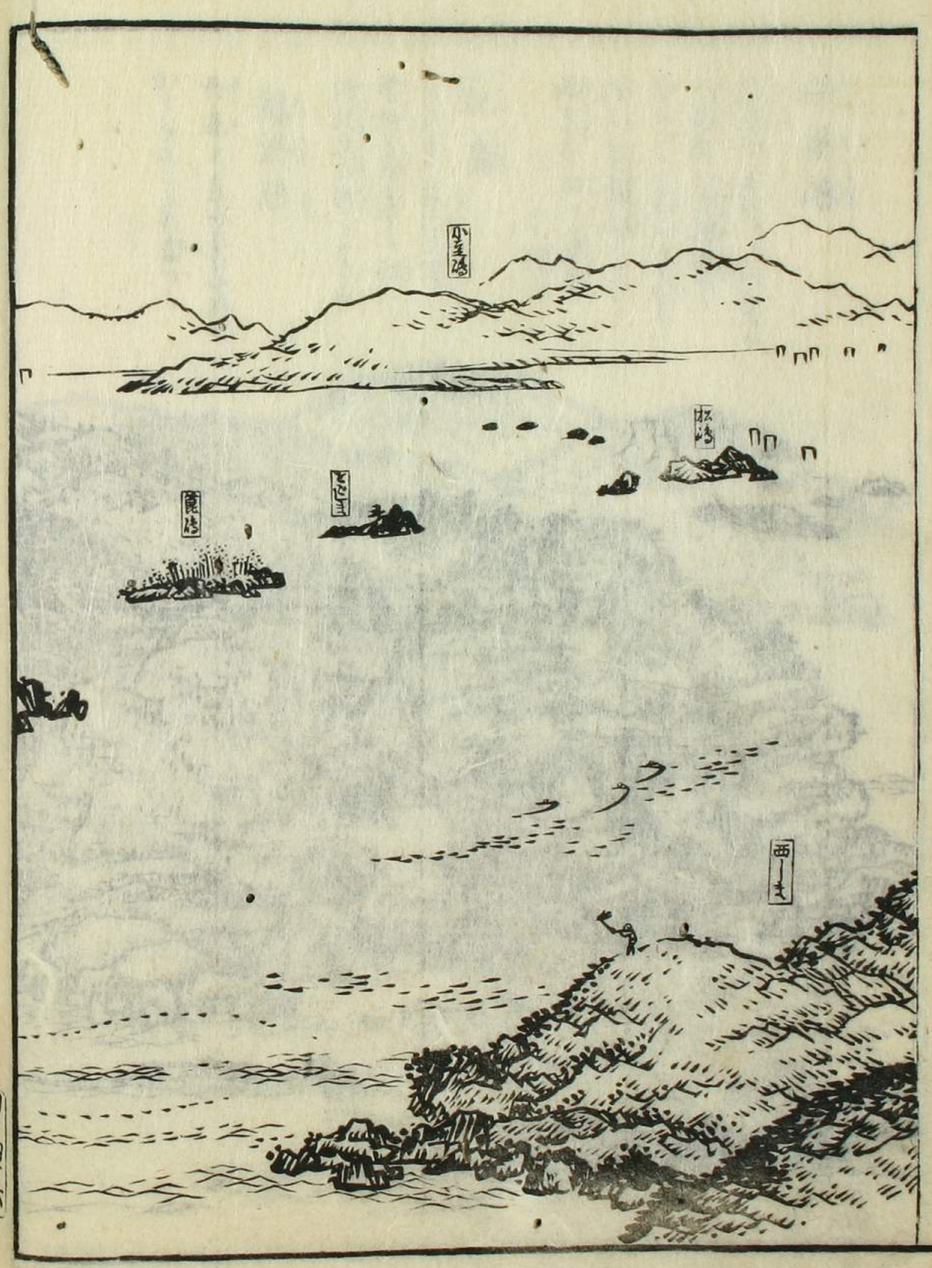
松島

新潟南三里よりり
野飼の馬多し松
嶋数嶋の勝景なり

鞍掛嶋

丹薬の東小嶋を
かくとうして名く





楯ケ鴻

丹前鴻とも
波の穏かな

坊勢島

坊勢寺の送鐘
湯風流の御守り
元寇之時北風山
突相撲奉納
都山鴻より眺望
附近名所

投鴻　佛岩

八ツ岩

元禄頃西郎と名乗て
海中へ飛込仮屋村より
汀と云ふ二十町余

観音崎　家傳あり佐々法道仙人大日寺の記並書を引一靈木を彫給ふしより至ると

長浜浦　家傳あり按州より名ありと

山

相野　大市郷相北村飾ノ伊保の奥にそびえるせるべし

白鳥の岡　おなじ村の南にあり　今又述あり

破磐神祠　大市郷西服村にあり破磐と称す　いつれも考記載なし

凡早嶺　伊勢村の東の峯　古跡俊覧曰此峯の岩より水八十余丈八へき竜の住ありて祈雨あれば風早より小又六丁の峯つき大黒岩

今登りてこれ其究なり　風早ゟ

の頂み松まひらう其山名礪砺としてにも同高き小松のまひ出

うは其究のありやあるべしされば昔よりひ風早ゟこれを

尚考なし　之昔をのぞむべし稲生出ると此山

稲根　大市郷峯相山の麓之山宗神天皇十三年九月香稲に登生ひ出ようおれとと奏し依りて稲を種として諸国ゟ献るべしと命じ給ふ　此山の国ゟ

（此さんともこれ宣ことも名ともいふ）　陸人を悉く発征をうるまし

揖保の稲穂なり印南の稲日ゟ来穂赤ゟ右播州の来穀甚上品なる多世ゟ知る者之稲と訓をる多日本紀神代ゟ

へるう延喜式粳と郡名ゟも書くり

峯相山鶏冠寺跡　北に村ゟ不の岸石鞍村ゟ傳多く移る　西播第一の伽藍之天心乃

峯相記ゟ云書あり　播州飾磨郡右跡とをるして鶏冠寺の僧の著

仙之経塚今ゟ西ゟ春尺大門の弘上伊勢村ゟ　大黒山石　峯相山の西南の凡早の峯ゟ

大師村　北ゟ武ゟ計者棲塵調池田加とゟ久しい地そ

大納言伴善男墓　上岡郷伊勢村ゟ巽の間陸倉山の林寺池中ゟあり　傳曰善男卿の清和天皇に仕て大納言ゟなり貞観八年伴豆岡ゟ流罪十年配所ゟ死去

年六十其附峯相山鶏冠寺繁昌の附みて善男ゟなりて大門茶

草庵ゟ結び是」ゟ其い地ゟ善男ゟなり中庸豊

拾秋実清縄ゟど五人あり字治拾遺ゟ善男應天門ゟ焼る

事久しう此の國史よも及ぬ名墓に後世伴氏の人實ありて
建うるべし
法善寺 東平松寺流と号ぬ古佛の菩薩 (お使ふつゝみ郎と西數とふ法あり)
招坐天照神社 古人伴物祈明宮と稱し拾郎 (伴物村よあり延式神名帳よ出う)
地の縣を飯粒といひし人良田に拾所天皇へ献しものゝ人の
名と郎名よ呼ぶ云 後世二郎として揖東揖西ふ仕へ山城浪
人の子孫播州よあり
一筋川 伴物谷より流る川そ谷流さし 大堤村 伴物村の西の方より山谷甚廣く
(あよ多くこゝ狭女郎川ともふ) 溪水九折よなりてあり
林田陣屋 愛宕川西谷林田の方構居村南小丘丁
祝田神社 武内之林田の社ともふ 祭神高樹加美神義都波女郎 (林田氏祭る古松山乃
日本武尊熊襲及び出雲の梟師ふ仕へ給ひし時楊麻古俗の 榊葉を大宮司某姓)
神乃風雛をば二神よ祈ませ給ひしふ古松ふよ揖ふ舟守神或ハ揖ふ
神ともふ雨を祈るふ依水徳ふ神ふれいかり

水波女 妹背窟 意松原 白砂水 疫守揖
うけひさむひしうふ久揖築ふ
ふもと田の森ふ揖築ふ意松原ふ疫守揖ふ
境内よ丹楓龍眼ふの大樹あり 建部内直頭源政宇の歌ふ有
或曰丹楓ハ和産なし享保中園主栽ゆ今よ大ふ生育ふる抱に及す 綿の紫
のごし赤ふ日本のうちでふたゞ此の宇にふ有ふ 詩よ丹楓と詠ぜるもの是ふ
琵琶山 林田社の南よあり其ふ
よくびよ似ふとて名く
あるじハこゝハ播州飾東郡八幡村よ住ふ
陰乃岩井忘水 花垣の南よあり
ときはふの陰のいと井のそこと見ゆる名ぞそみなれ 名所
松山城趾 林田氏松山村よ在城ふ永正年中赤松政村夷ふ仕へ
新宮陣屋 宮内よあり
みや彈 山陰道飾西より宍ふつゞきて佐用よいたる 千川より一里斗天正ふ年
上月城夷の時秀吉陣ふ 備前の浮田勢ふ
依藤雅次墓 岳山よ陽ふ

窪山城趾　林田庄久保村よりあり谷沢甲斐守郎國武これを
守る正平年中赤松政村攻落せし
佐見山　奥さゝおよりあり

さゝまもらひいでたゝさは」さゝれなのかのうへきみをねよやろ沢や

那波山神社　沢田村よりあり境内の白櫻の樹あり
「那波山神社　峯相記に八幡若狭ありしと
嵯峨　鶴の形よりうつる山之其尾傍
「嵯峨　鶴ふれうたゝ名くれ
城部禅尼塚　城部庄平保村　古へ城部細川の邑」とゝみて冷泉家世
山腹よりあり　々の采地之　今も細川にゝふ　皇太后宮古美後成乃御女安の濱とそ
小流村中よりあり　「播磨國城部の庄とゝふ百首歌人知らま」ゝを地頭乃妨げ
多く侍りければ城部の庄とゝふ百首歌人知らま」ゝを地頭乃妨げ
らせゝるゝ
君ひとり松ふき風の数そへて　新勅撰
泰時久し〳〵
よゝ中の風の跡もなくなりぬる心のまゝのみさほにて　新勅撰
と俾濱よも及びし廿一ケ条の地頭の掟法を結ゝめらま」ていゝり

其後世中の清水をゝとゝ
「ゝもぬりゝ心のみ息よ
と詠まゝうも其城部の庄へ下らま」ゝる歌あり

奥書曰　阿佛尼安嘉門院の足案ゝ
人ゐ氏ゐ数ゐ歌よ」く後剃髪して其法名を
紀幼十二ゝ歳日記ゝよあり

碧玉集曰　大納言政ゐ世の孫　孫生乃以播州細川村へ下向」城部
庄南社へ参りゝゐ佐世宮ゝ
○按ゝゝ佐世村ゐ神社記」佐田村神の
あゝぐそよ三十年ゝまりゝと聞きて佐世の宮垣杉ゐ繁を

三坂の社そ　今三坂ゝふ小字坂の小社そのゝゝ按ゝれ
「ゝ」よ三坂の松のゝもち縄めぐりあふ社命なゝきも
二月十日此ゐそ身まうゝる女のゝし三十二ゐま千よ参り侍るまゝ
よゐとゝり侍りて墓ゐに参り思ひでけゝ
「ゝる孫生の宮と墓ひ来ゐ苔のゝ下も我や結ゝん

むら[illegible]り[illegible]有當時のあり[illegible]ける[illegible]

十[illegible]のまり[illegible]し[illegible]兵奥深く殘る[illegible]淋し[illegible]栄のり[illegible]

政務下向の時の旅人の休憩する[illegible]

亀[illegible]山　城部[illegible]

未だ古墳[illegible]

唐[illegible]猫谷　[illegible]

の谷之

花垣清水　城部[illegible]

[illegible]水乃其一[illegible]

播磨名所巡覽圖會卷之[illegible]終